

文化と交流

No.2 / 2014 年 2 月

特集 移動する人びと



周防大島文化交流センター

表紙写真：眷竜寺（周防大島西方）／撮影：西本和照

目次

【特集】移動する人びと	1
・長州大工へのまなざし	川口智 2
・カウアイの記憶	久行大輝 8
・周防大島出稼雑考	高木泰伸 11
・循環型の「定住」を考える	山本康文 22
・書誌紹介 周防大島町文化振興会『長州大工の足跡』／土井彌太郎『山口県大島郡ハワイ移民史』	24
【論考】	
・亥の子に関する覚書	山根一史 27
・瀬戸内で聞いた船大工の唄や話	戎谷和修 39
・古写真の風景をあぐるく（二）——水田からミカン畑へ——	高木泰伸 49
【コラム】周防大島の窓	
・「私の好きな周防大島」をテーマに東京写真月間「二〇〇〇人の写真展」に出展	柳原一徳 59
・命の水	舩田良樹 61
【活動記録】	
・周防大島文化交流センター日誌（平成二五年九月～十二月）	64
投稿規定	（裏表紙）

「特集 移動する人びと」にあたって

周防大島文化交流センター

周防大島は全国的にみても多様な人びとの移動の歴史があります。そのなかでも長州大工やハワイ移民は代表的な事例といえるでしょう。特にそのハワイ移民の歴史を考えると、昨年は周防大島町がカウアイ島との姉妹島提携をして五〇周年を迎えました。

そこで、この度の『文化と交流』では「移動する人びと」をテーマに特集を組むことにいたしました。

川口論文は、どのような目で長州大工の作品を見ていくかという問題について、「職人」の視点の重要性がのべられています。島の内外の神社仏閣を見る際の重要な指摘といえるでしょう。久行論文は姉妹島提携五〇周年の記念行事のためにカウアイ島を訪問した報告です。カウアイ島の人びとからの聞き書きや、史跡についての言及はハワイ移民の歴史継承の問題とも深く関わっています。高木論文は、幕末から現在までの人びとの移動の歴史を概観したもので、「人間の移動」をいかに捉えるのかに言及したものです。特に、いまの課題として高度経済成長期に活躍した人びとのライフストーリーの聞きとりの必要性を指摘しています。また、山本論文は現在推進されている定住促進への取り組みについての考察で、島の未来を考える論考といえるでしょう。あわせて、書誌紹介では長州大工研究とハワイ移民研究の先駆的な二冊を取り上げています。

「移動」というテーマは、人間がいかに活動してきたか、いかに行動していくかを考える上で重要な課題設定です。特に現在の地方が抱える少子高齢化とも深い関わりがあります。

各論考を通じて、周防大島を舞台にした人間の営みの一端を感じていただければ幸いです。

長州大工へのまなざし

川口 智

高知県の中西部山間地帯の村々を歩くと、どこでも長州大工の話が聞ける。長州大工が出稼ぎに来るまでは掘立小屋形式の粗末な家であったのが、今日のような建て家になり座敷構えの大きな家になった。大工がいなかったけれども、長州大工に弟子入りして技術を修得して村にも大工職人が誕生したとか、秀れた技術を持った長州大工、働き者だった長州大工、などの話が数多く残っており、長州大工が村人に尊敬の念を持たれていたことがよくわかる。

坂本正夫『東和町誌資料編一長州大工』平成五年

岩国市の建築士・室中伝（むろなか・ゆずる）さんは昭和三四年七月、周防大島の平野（ひらの）に生まれた。

東和中学校を卒業後、一五歳で島内の大工棟梁へ弟子入りし、四年後には早々と独立を果たした。以来、伝統的な日本建築の現場で幾多の経験を積み、平成の錦帯橋架け

替えにもスタッフの一人として参加している。

その錦帯橋から車で一五キロほど走ったところにある山間の小集落で平成二年一月、一軒の民家が火災に見舞われた。二〇年ほど前に台風で被災した本宅の藁屋根を瓦に葺き替え、中二階シコロ崩しの形に改造したのが室中さんだったので、このたびも被災後の改装を任されることになった。

ただし改装とはいっても、全焼した本宅を建て替える代わりに、焼け残った長屋を人が住めるようにしなければならなかった。そこで被災状況を確認するために室中さんが長屋の梁へ上がってみると、建てられた当時の図板と棟札が、棟束に釘で打ち付けられていた。

図板とは設計図を記した板のことで、棟札とは施主や大工の名を記した札のことである。図板に記された番付は、かつて室中さんが教えを受けた古老たちですら使ったことのない「回り番付」と呼ばれる旧い方式のものであった。そこには「明治拾七年 申ノ正月拾七日」と施工年月日が記されていて、棟札には「大工棟梁大嶋郡西方村 二宮和作 山田長八」という墨書があった。

約一三〇年前、郷里の先人がこの山間の地に、どのよ

うな縁で棟梁として招かれたのか。そして再び一三〇年の時を経て、同じ島に生まれた大工が先人の普請の跡を訪ねることになろうとは――。

「これを建てた人たちも、ほかの大工が来ないようなこの山奥に稼ぎに来たんじゃろう」

室中さんは出稼ぎこそしたことはなかったが、伝統建築に理解のある施主を求めて長らく山間僻地を巡り歩いて来たので、かつての出稼ぎ大工たちに自身の歩みを重ね合わせたのである。

二〇年ほど前に屋根を葺き替えた当時の施主は火災の少し前に亡くなり、そのご長男が新たな施主となった。伝統建築を専門とする室中さんにとって年下の施主はめ



焼け残った長屋の棟札（室中伝さん撮影）

ずらしく、歳月の移り変わりを感じたという。モダンな新居を望む若い施主に最初は戸惑ったが、話しているうちに次第に意見が一致するようになった。そして「火災に遭う前の家は木柄も太かった。籠寄せ玄関を持つ重厚な木組みを見てきたので、節はあっても何本かの大黒柱が組み込めないものだろうか」という施主の一言に室中さんの腕が鳴った。

棟上げの前後を除き、大工、現場管理、雑工事と、室中さんは、ほぼ独り舞台で経費節減に努めた。その一方で、玄関の框、式台、幅木を紅葉の木で揃えるなど、手づくりの味わいにもこだわった。保険の検査では、担当者から興味深げに仕口や継ぎ手について訊かれたが、それぞれの仕組みを丁寧に説明することでクリアした。

若い施主からは和室や土壁の要望がない代わりに、吹き抜けの多い空間構成を依頼された。図面で考えた感覚と実際の雰囲気がどのように変わるのか、室中さんにとっては大きな実験だったが、洋風の中にも日本建築の技を取り入れた斬新な新居が、平成二三年一〇月に無事完成した。

施主の息子さんは中学校に上がったばかりだったが、



室中さんが改装した住宅の内部
(室中伝さん撮影)

春休みには毎日現場に来て室中さんの仕事を手伝ってくれた。休憩のときに、その息子さんから「火事るとき弟が二俵の新米を必死で運びだした」と聞き「親の米作りを間近で見ていて、子どもながらに思いがあつたんじゃない」と胸を打たれた。

こうした仕事先での一つひとつの出会いを室中さんは大事にしている。そこで築かれた人間関係が、室中さんが口癖のようにいう「縁」なのである。

江戸時代中期から明治、大正の頃にかけて活躍した周防大島の大工たちも、地縁血縁の希薄な出稼ぎ先で、そうした「縁」を大事にしていた。その結果、主な出稼ぎ先だった四国山地では「長州大工」と呼ばれ、地元の人々から敬愛されたという。

長州大工研究の第一人者である坂本正夫さんは、二〇年余りの歳月を費やして四国山地を隈なく歩き、長州大工が建てた約二〇〇軒もの社寺や民家の存在を明らかにした。坂本さんの研究は『東和町誌』の一編としてまとめられ、発行後二〇年経ったいまも読者から好評を博している。

ところが室中さんにこの本の感想をお聞きすると、いつもほかの読者とは異なる反応が返ってくる。

「四国山地の者は自分たちで掘立小屋みたいな家を建てたんじゃけえ、木の扱いに慣れてたんじゃなからうか。

そんな土地で余所者の大工がモタモタ仕事してたらわられる。見習い大工にはセンナイ現場じゃったと思うよ」

「四国にも腕の立つ大工はおつたろうが、貧しい村で働いても割に合わんけえ、町なかで稼いだんじやろ。山奥には誰も行かんけえ、大島の大工が行ったんじやろ」

室中さんの口調は柔らかい。しかし、その言葉を文字に起こしてみると、現場を知る人ならではの厳しさが伝わってくる。

長州大工は労働基準法など存在しない時代の出稼ぎだった。著者である坂本さん自身も、調査の途中で書きにくい過去の出来事を何度も耳にしたことだろう。だからこそ、全力で働いた大工たちと、それを温かく迎え入れた大勢の村人たちがいたという事実を読者に伝えたい一心で、この本を世に送り出したのではないだろうか。あるいは周防大島の読者なら、言わずもがなのことは書か

なくても察してくれるだろうと考えていたのかも知れない。

とはいえ十年一昔という言葉もある。いまでは長州大工はもちろん、ハワイ移民の話ですら古老たちの口から伝え聞く機会は減り、先人たちの苦労を知る島民も少なくなつた。そうした中で、かつて出稼ぎの島と呼ばれたこの島の実態を少しでも正確に知ろうとしたとき、室中さんのような存在は貴重だと思う。

無論、どんなに鋭い意見でも、史料に基づかないものは単なる推測でしかない。しかし一方で、玄人の推測を基に調べれば、素人考えで調べるよりも実りある結果が生まれるのも、また事実である。

例えば高知県仁淀川町にある秋葉神社の写真を室中さんにお見せしたときのことである。同社の社殿彫刻は昭和一五年に西方（にしがた）出身の門井浅一が手掛けたことはわかっていたが、本殿脇障子の彫刻を見て「これは普通の職人技じゃなからう。職人はきれいに彫ろうとするけえ、わざと刀痕なんか残さんよ。立体の捉え方も違うし、日展とか、そういう感じの彫刻じゃね」と室中さんが呟いた。



秋葉まつりで知られる秋葉神社と、
同社の本殿脇障子に刻まれた「太平記」の一場面

そこで後日、同社の棟札を調べてみると「彫塑師 門井浅一」と記されていた。彫塑とは「彫る、刻む」といった意味に「塑造する」という意味を加えた美術用語である。門井がこの用語を自身の肩書きに使っていたということは、つまり、近代彫刻を意識した者が彫ったという室中さんの推測が当たっていたのである。

また、これまでほとんど知られることのなかった菊田家の大工たちについても、室中さんが目を向けさせてくれた。「昔、平野に菊田という棟梁がおって、堂宮も民家もレベルの高い仕事をしたと聞いたことがある。それだけ技術の幅が広がったんじゃないか、調べてみたら勉強になると思うよ」という室中さんの言葉に導かれて菊田家の子孫を訪ねると「ウチのお墓に色々書いてあります」と近くの共同墓地まで案内してくださった。

そこには菊田権兵衛という大工の墓があり、彼が明治時代に仁淀川沿いの村々で三〇余戸の家を建てたので、村人が感謝の気持ちを込めて墓を建立したという経緯が刻まれていた。菊田が建てた家の当主と思われる人々の名も列記されていることから、この墓の発見は、これまで社寺建築に偏りがちだった長州大工研究の軌道修正を

促す出来事かも知れないと、筆者は感じている。

遠い過去を知るためのヒントは、現場を知る人の「まなざし」の中に潜んでいる。室中さんの言葉に耳を傾けながら、社寺や古民家を巡る日々がしばらくは続きそう
だ。

*

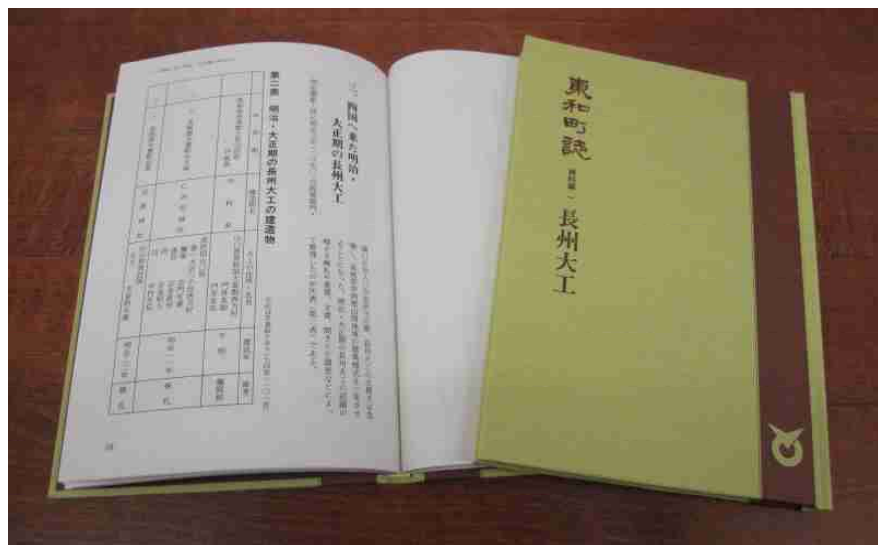
*

*

拙稿は室中さんのブログ「大工に成って良かった」の内容を一部参考にさせていただきました。



菊田権兵衛の墓



本文の中でご紹介した『東和町誌 資料編一 長州大工』
周防大島文化交流センターで販売中（税込価格 1,000 円）

カウアイの記憶

久行 大輝

周防大島は瀬戸内に浮かぶ「移民の島」だった。一八八五（明治一八）年に始まったハワイ官約移民。サトウキビ畑の厳しい労働や劣悪な住環境は、遠い昔の記憶となり、移民の子孫は繁栄を築く。世代を経て父祖の地との絆が薄れる中で、米国ハワイ州カウアイ島には、いまなお周防大島に思いを寄せる人たちがいた。

昨年、姉妹島提携五〇周年を迎えた周防大島とカウアイ島。一〇月にあった記念式典を見学するため、四泊六



周防大島との交流を記念するモニュメントが、カウアイ島の各地にある

日の旅程で町訪問団と一緒に現地を訪れた。

カウアイ島は、ハワイ諸島最北端に位置する円形の島。面積は周防大島の一〇倍強の約一四三〇平方キロある。

植生豊かで緑が多く、通称「ガーデン・アイランド」。映画「ブルー・ハワイ」の舞台で知られ、「ジュラシック・パーク」のロケ地にもなった。早くからサトウキビ栽培が始まった島でもある。

ホノルルから約三〇分の飛行機で降り立った郡庁舎がある島の中心部リフエ。その道路のそばには、コーヒ畑や放置された農地が広がっていた。「ほとんどがサトウキビ畑だった」。案内してくれた日系人が教えてくれた。ハワイの砂糖産業が拡大途上にあった一九世紀末、水路を引き、斜面を切り開いて「シュガー・コースト」に変えたのは、一世たちだった。その一世たちの汗と涙、血が染み込んでいる畑は、代換作物への転用が急速に進んでいる。

「もうキビはだめ」「子や孫はホノルルへ出ていった」「この家もわしの代でおしまい」……。訪ね歩く先々で、ため息まじりの言葉が返ってくる。語るのは引退生活を送る二世夫婦か、一人暮らしのお年寄り。次第に気が重



上：多くの日系人が眠るハナマウルの墓地
左：カパアにひっそりと立つ灯籠

くなくなった。基幹産業が低迷し、ホノルルへの人口流出。ミカン産業が衰え、過疎化が進む周防大島と共通点は多い。

リフエの隣町ハナマウルを訪れた。街外れの海を見下ろす斜面に一世たちの墓地があった。赤茶けた土に埋もれた石、こけむして傾いた碑……。刻んだ文字が風化し、判読できる墓石は少なかった。

その中に、「山口縣大島郡大島町」と書かれた墓石がひっそりと立っていた。この地で生涯を終えた周防大島の出身者。出身地の住所まで正確に彫り込まれている文字を見て、強い望郷の思いを感じた。異国の地で母国を思う日本人の痕跡があった。六四〇〇キロ離れたハワイに渡った移民たちは、故郷日本を子や孫にどう伝えたのだろうか。考えずにいらなかった。

リフエから車で約一時間の西部の町カパアに、その灯籠はあった。飲食店や雑貨店などが並ぶレトロな商店街の外れにある海浜公園。その灯籠は、六角形をしたコンクリート製で高さ約四、五メートルという。

建てられたのは一九一五（大正四）年。大正天皇の即位を記念して日系人たちが建てたとみられる。

その灯籠が六年前に修復された。灯籠のいわれをきちんと記録し、カウアイの歴史の一部として残すのが目的だった。

一〇〇年近く昔の灯籠を復元された理由はその歴史にある。カパアのシンボルの一つだった灯籠は太平洋戦争さなかの四三年にひそかに地中に埋められた。日本が敵国となり、破壊を免れるためだったという。七〇年にいったん掘り出されたが、再び埋められ、官約移民一〇〇周年後の八七年にまた掘り起こされた経緯がある。

日系人の多くは、祖国が戦った悲劇に苦しみながら生きのびた記憶を持つ。その苦難の生涯とびつたり重なり合う灯籠は、日系人にとって忘れがたい道標の一つなのだという。

カウアイ島の日系人のほとんどが日本語を読めない。

一緒に灯籠を訪ねた日系四世は、第一回官約移民の子孫だった。リフエにある自宅の居間には、一世の旅券や移民の約定書が額に入れて大切に飾られていた。「今の自分があるのは曾祖父のおかげ」と力を込める。

日系人が多いリフエの老人ホームも訪ねた。お年寄りの手を握ると強く握り替えされ、「日本に行きたい」と話

すお年寄りもいた。

二つの島をつないだ官約移民開始から一三〇年近く。当時を知る人は既にいなくなつた。しかし、一世の思いを受け継いだ人々、一世の思いが刻んだ灯籠や碑が両島の関係を静かに見守っている。

短い旅だったが、カウアイ島で、日本人が忘れかけている何かを見つけることができた。(周防大島町久賀)

はじめに

「出稼ぎの島」「移民の島」…このような言葉が周防大島を語るときの枕に置かれる。「人間の移動」という視点から周防大島の歴史を掘り下げてみると、興味をそそられる問題がいくつも見えてくる。本稿では、周防大島からみた「人間の移動」の歴史を考えてみたい。

とはいえ、人びとの移動の歴史を把握することはまずもって難しい。これは前近代においてはその資料が乏しいこと、また近代以降にはその活動が多様かつ広範囲になっっていること、大まかに言えばそういった資料の不足と人間活動の多様性というのが、この問題の叙述を難しくしている要因だろう。よって、ここでは筋の通った形で叙述することは「人間の移動」という問題をむしろ矮小化する恐れがあるので、とにかく思いつく課題や、これまで見てきた資料、あるいは地域の人から聞いた話でできるだけ多く書き連ねてみたい。

一、幕末から近代の出稼ぎ

周防大島の出稼ぎの形態を語るときに、「労働力売るのではなく、技術を売った」ということが指摘される。その代表が長州大工といわれる大工集団の存在だろう。サツマイモの栽培が広がり、幕末期に島の人口は爆発的に増加した。そして島外への出稼ぎも増加したのである。大工だけでなく、木挽き、瓦職人、石工、塩田浜子、船乗など技術を携えた人たちが島の外で仕事をした。

ここで思いいたるのが、藩を越えた活動が活発化とその統制はどのようなものであったのだろうか、という問題である。もちろん藩へ願い出て許可を得ることもあったろうが、そういった史料を周防大島で目にしたことはない。しかし、それほど藩の統制が厳格に行われたとも思えない。農耕を中心にして考えると江戸時代は土地に縛り付け、年貢を納めるという土地緊縛の時代としてとらえがちだが、上記のような人びとの動きを考えると、教科書とは違った近世史像が見えてくるのではないだろうか。さらに人びとの活発化する時代がいつ頃かを考えることで、幕藩制の実態と変遷も見えてくるように思う。長州大工研究はそのような新たな近世史像の構築にも寄

与する可能性を秘めている。

そして、明治期に入ると、よりいっそう人びとの移動は広範かつ多様性を帯びてくる。ハワイへの移民は、最初は官約という形で開始された。この移民事業は国家の政策としてしても要素もあり、土井彌太郎氏の『山口県大島郡ハワイ移民史』によれば、西洋式の農法の習得という目的もあつたという^{〔※1〕}。ハワイ移民事業は全国的に希望者を募った事業であつたので、山口県とおなじく移民の多かった広島や熊本といった各地の移民希望者募集の実態を見ていくことで、その輩出した地域の特性や施策などにより明らかになるし、なぜ周防大島から多くの人が海を渡ったかも比較のなかで明らかになるかもしれない。輩出地域の特性ということに焦点をあてる研究も必要になるだろう^{〔※2〕}。

周防大島からはフィジーや北米などへの移民もあつた。その記録はハワイほど整理されていない。ハワイの移民事業が成功であつたかどうかは見る人の視点によって異なるだろうが、ハワイの日系人社会の形成がどのようなにしてなされていったのかも興味の湧くところである。

また、海外から帰った人たちが地域にもたらした文化

的側面に注目する必要があるだろう。例えば、日本ハワイ移民資料館（もとはサンフランシスコへ渡った福元氏の所有）をはじめその周辺の屋代地区の家の造りを見ると、二階建ての木造の家をみることができる。同じ農村地帯にあつて土居や津原川周辺の中二階の養蚕造りの家が立ちならぶ風景とは、明らかに趣を異にしている。屋代地区だけでなく各集落のなかにモダンな家を見ることが少なくない。そういった家にはステンドグラスの窓があつたりする。

それから、ハワイ移民資料館にはナイフやフォーク、あるいはワッフル焼き器などの生活用具が展示されていて、ハワイ・北米から帰った人たちの食文化をうかがい知ることができる。そして周防大島の人たちは早くからハワイ、北米から送られてくるコーヒーや菓子などハイカラな食べ物に触れる機会もしばしばだったようだ。甘い物の少ない時代に親類がハワイから砂糖を送ってくれてそれをこっそり舐めるのが楽しみだったとか、出稼ぎでアメリカに行っていた父親がチョコレートを送ってくれたとか、そういった話を耳にする。大島と同じく移民の多かった八島には、手紙を書いてあげたお札にパ

ンとコーヒーをもらって、今も朝食にはパンとコーヒーが欠かせないという、そんなかつて郵便局に勤めていた人もいるとの話を聞いた。周防大島はじめ瀬戸内の島々が、海外文化の伝わる窓口であったことを物語っている。

さらに、よく知られた話としてアロハシャツは日本人が考案したものといわれている。こういった衣食住の生活文化の問題をモノに即して考えてみるのも面白いだろう。

二、島からの転出と移入―技術・文化の伝播について

島の外への出稼ぎで最も活発だったのは漁民たちであつたろう。森本孝氏は、沖家室の人びとが朝鮮・台湾・ハワイの漁場を開拓していった歴史を明らかにされている(※³)。また、周防大島の漁民の移動性を物語り、よく知られているのが『忘れられた日本人』に収められた宮本常一の「梶田富五郎」の話だろう(※⁴)。周防大島久賀から幼くして「メシモライ」となって対馬浅瀬の村を開拓した歴史、梶田翁の昔語りをまとめた作品である。同じく宮本常一が記した『久賀町誌』には、北浦さらに対馬へと出漁した久賀漁民の活動が記されている(※⁵)。

この『久賀町誌』を読んでいて、もう一つ興味をひかれるのは、寛永年間における和歌山県の塩津漁民による鰯大網の伝播の話である。他国網を入れるかどうかによつては、安下庄と久賀との間での意見の対立することもあるが、漁法を学ぶためにも紀州網が入れるようになったと述べられている。周防大島の漁民が北浦や対馬、さらには朝鮮・ハワイへとその活動を広げていったように、周防大島近海へも他所から漁民が出漁し、そこに技術の伝播があつた。

紀州網だけでなく、瀬戸内の因島や豊島、三原幸崎の能地の漁民も大島近海へ出漁していて、沖家室の洲崎には豊島の家船が停泊していたという。また情島では豊島から出漁して来る者も多かったし、津和地島から鰯釣りに来る人が季節の風物詩となっていたという。

宮本常一は、そんな漁民の移動性について早くから注目している。『庶民の発見』に収められた「庶民のねがい」には、広島から出漁してきた船住まいの漁民との交流の一幕が描かれているし(※⁶)、また著作のなかで家船についてしばしば触れている。それは、宮本自身がそのような漁民たちと身近に関わっていたからだろう。

また祖父の家系はもと蒲刈島の漁師で、魚を追って周防大島東端の油宇にあり、その後安下庄に住むようになったという人や、自分のルーツはもともと祝島であるとか、そんな話を聞くこともある。

「出稼ぎの島」という見方は、長州大工やハワイ移民など島外へ出ていく人びとの活動に注目しがちだが、周防大島へ移り住んだり、出稼ぎに來たりした人たちの営みも見ることが出来るかもしれない。

これは漁民に限った話ではない。祝島からは酒造りの杜氏として出稼ぎに來る人があった。祝島の橋部好明さんの話では、橋本という人が祝島から杜氏として周防大島和田の村上酒店へ行き、石積みの技術を学んできたという。そして、橋本は島の若者を集めて石工仕事を教えた。祝島の港から集落をみると、小学校の高い石積みを見ることが出来るが、昭和初期に橋本の弟子の一人であった薬師という人が主になって築いた。少しでも広い敷地をとということで、地域が総出で仕事をして築いたものだという。

また、「天空の棚田」として知られる平萬次さんの棚田は〔※7〕、その祖父・亀次郎さんが築いたものであり、亀

次郎さんもまた、その橋本という人から石工技術を学んだという。

祝島ではもともと米がでなかったが、大正期の耕地整理で三浦地区に水田を拓いた。溜め池をつくったり、水を溜める石積みの技術がなければできなかったことであると橋部さんは教えてくれた。

また浮島の石切場は、愛媛県の伯方島の人が拓いたという。浮島で聞いた話では、赤瀬という人が拓いたという。浮島への渡船で乗り合わせた馬越さんは、もと石船を持つていて、祖父が伯方島から移り住んだという。梶田清七氏の『わたしの浮島風土記』によれば、赤瀬源作という伯方島出身の人物が採石業の先駆者で、明治年間に石切場を拓いたとある〔※8〕。石切場の跡のこる楽江は、いま小学校と数件の家があるだけだが、かつては店もあつて、人口も多かった。まさに伯方島の石工たちによって拓かれたムラというのだ。

瀬戸内にはよい石の採れる島が多い。愛媛県の伯方島、越智大島の石工たちは良質の石を求めて各地で石切場を拓き、また多くの石工たちを呼び寄せた。岡山県の北木島は特に良質の御影石を産出し最盛期には二〇〇近い丁

場があったところだが、ここもまた越智大島・伯方島の石工たちが活躍した。浮島の石切場からもこのような瀬戸内海島嶼部の人びとの移動性をみることができる。

三、海外への雄飛と引揚者による島の開拓

先に触れた宮本常一の『忘れられた日本人』には、近所に住む古老・増田伊太郎から聞き取った「世間師(一)」が収録されている。はじめは木挽仕事で、後に修業して大工仕事で各地を幕末から明治にかけて渡り歩いた話であるが、この古老の足跡だけを並べてみても面白い。

幕長戦争に出征↓愛媛・高知(木挽き)

↓周防大島(大工修業) ↓熊本(西南戦争の復興)

↓周防大島↓鹿児島(寺院建築)

↓東京(海軍士官の家建築) ↓岐阜↓周防大島

↓山口↓台湾(日清戦争後) ↓下関

↓朝鮮半島・釜山(植民地拡大) ↓仁川↓京城

↓大阪↓北九州

↓周防大島(※日露戦争で子息戦死)

ここで注目すべきは、この人物が実在するののかとか、本当にこれほどいろいろな場所を渡り歩いたのかのといっ

た真偽の検証ではない。宮本は、このような話が出て来る周防大島の気質や風土に注目しているのである。明治以降の大日本帝国の拡大とともに島嶼地域の人びとの移動も活発になる。宮本は明らかにその時代性を念頭に置きながら、各地を渡りあるく「世間師」の動きを書き記している。

大正期に編纂された『大島郡大観』によれば、大正五年の在外国者は、ハワイ/三九一二人、北米/一三四四人、中国/三六九、その他/二九三人となっている。さらに、ほぼ同時期に台湾で約五〇〇人、朝鮮半島で約二五〇〇人、そのほか樺太、他府県で四〇〇〇人以上の人びとが移り住んでいたという^{〔※9〕}。先述したようにハワイ・北米の在住者が突出して多いのが特徴だが、朝鮮・台湾といった植民地の在住者も見過ごしてはいけない。

では、朝鮮・台湾での仕事はなんであったのか。沖家で発行されていた『かむろ』を分析した森本孝氏の研究によると、大正五年頃の沖家室出身の台湾在住者は六二名で五一人が漁業に従事していた。同じく朝鮮半島の在住者は一〇九名で、材木商や米穀商、廻漕業、醸造業などの商工業に従事している者が多かったという^{〔※10〕}。

引揚者数地区別統計(昭和20年8月～昭和25年)

	三ヶ浦	外入	大積・小積	地家室	佐連	沖家室	森・平野	和佐・神浦	和田・内入 小泊	油田	合計
朝鮮	108	134	62	130	61	266	92	56	81	45	1035
満州	32	45	15	61	6	119	93	23	40	20	454
台湾	5	8	12	5	17	330	10	3	2	5	397
中国	9	7		2	3	35	2	2	4	16	80
ウラジオ	1										1
ラグーン	1										1
シベリア		1									1
ソビエト						1	1				2
ボナベ			1								1
バンコク			1								1
セレベス						6					6
ボルネオ						1					1
フィリピン							33				33
ジャワ										1	1
サイゴン										1	1
デリー				1							1
カナダ			5					5			10
アメリカ							1	3			4
在住地不明								10	11	238	259
その他			22								22
合計	156	195	118	199	87	758	232	102	138	326	2311
世帯数	52	78	33	48	30	367	30	47	51	179	915

※『東和町誌』630～637頁より作成／大積・小積地区の合計者数を修正した。

そして、この後、満州国が建国されると満州移民も増加してくる。

沖家室島は特に移住者の多いところであったが、森本氏のようにグローバルな視点で、移住者たちの特徴を明らかにしていく必要があるだろう。東アジア地域の近現代を考える入口として、旧植民地地域での大島出身者の活動に注目することができる。

さて、敗戦によって大日本帝国が解体された後、これらの海外在住者はどうなったのか。『東和町誌』には、現東和地区における昭和二〇年八月～同二五年の海外からの引揚者数が記されている。それをまとめたのが上の表である。総計で、二三〇〇人を超える人たちが故郷へ戻ってきた。そのほとんどが、朝鮮・満州・台湾といった旧植民地からである。戦時中に大島郡全体で五万五〇〇〇人ほどであった周防大島の人口は、昭和二三年には七万人に増加した〔※二〕。

戦後のインフレと食糧難の時代に、二割以上も増えた人口はどのようにして飢えを凌いだのだろうか。ハワイ・北米からの多量の支援物資もあったし、漁業（特にイワシ網漁）によることも大きかったようようである。

そして、いま無人島になっている油宇沖の片島（片山）には引揚者たちが入植・開墾したというし、情島の属島の諸島でも食糧難の時に山頂でイモをつくっていたという。大水無瀬島へも沖家室漁民が戦後に再び入植したという。

現在、文化交流センターで資料整理を進めている旧白木村役場文書にも昭和二〇年代の開拓関係資料が含まれている。どのような形で入植していったかを明らかにすることが出来るかもしれないので、地域での聞き取りも踏まえつつ、国や県当局の施策もふくめて今後分析を進めていきたい。

旧東和町に限ってみると、昭和二三年をピークに人口が流出していく。昭和三年の二万三九五五人から昭和三年には一万七五三三人となっており、二八六二人が減少している（※13）。

『東和町誌』では、疎開者が他地域に新たな職場を求めて転出していったことを指摘しているが、表に掲げた引揚者数と近い数字であることが興味深い。当該期の東和地区で保有でき得る人口の上限が一万五〇〇〇人ほどであったのではないかと、いささか乱暴な推測をし

てみたくなる。

ともかく、これらの人びとの多くが都市や工業地帯へと就職していったようであり、再び大島の人びとが外へ向けて移動しはじめるのである。そして、この就職にあつては島外に定住した同郷の人たちの引き立てが大きかつたという。

四、高度経済成長の人口移動とライフヒストリー

地域の集まりがあつた際に、島に戻った人から聞く個人史は実に豊かである。ここでは二人の話を紹介したい。いずれも酒席の話であつて、私自身その場で聞いた話でメモもとっていないことであり、また内容を深く検証もしていないから、資料的価値は高くない。だが、戦後史のなかでの「人間の移動」を考えるきっかけになるので、ともかくも書き残しておきたい。

（一）

Aさんは高校まで周防大島で過ごして、東京の大学に進学して建築を学んだ。体が大きかったので大学時代は柔道部に所属して、とにかくよく後輩たちと新宿の街を飲みあるいたという。下級生の時には先輩が出してくれ

たが、上級生になると後輩をかわいがるために金もなかったので、タバコのちよつと長いまま落ちていたものを見つけてはこっそりと拾って吸った。面倒見がすぎたのだ。

時代は大学紛争真つ盛りで、体育会に属していたAさんはよく学生の政治団体と衝突したという。それでも、政治団体のなかには仲良くしていた知人もいて、血だらけになって逃げ回っていた知人を助けたりもした。あの時代は何か正しいものがあるように思っていたが、何が正しかったのか、今になればよくわからないという。とつぜん友人が居なくなったりしたこともあった。政治にかぶれすぎるとろくなことはないというのを知ったという。

大学を卒業した後は、広島県福山市の建設関係の会社に就職して図面を引いた。日本鋼管が業績を伸ばしていた時だったので、仕事はいくらでもあった。本当に寝る間を惜しんで工場や建物の建設図面を書いた。

建設関係になると血の気の多い若者も多く、飲み屋でヤクザとトラブルを起こす者がいて、柔道をやっていたAさんはそんなときも頼りにされた。仕事の合間に警察

に拘留された仲間を「貰い請け」に行ったりもした。事務所の若い女の子がヤクザにいたずらをされて、その後始末をつけたこともあったという。

会社の業績は順調に伸びて、東京に支店を出すことになり、Aさんは東京支店で霞ヶ関の官公庁が新築される仕事をとる営業業務につくことになった。数百億の事業だから、何とか食い込んで仕事をとっていった。「官僚が仕事をしている建物は、みんなわしらの仕事で出来たんだ」とAさんは誇らしげに語る。

母親の介護のために東京と周防大島を行き来していたが、退職を機にふるさとの周防大島へ帰り、いまは地域の祭りやフットボール大会が楽しみだという。

(二)

Bさんは終戦間際にカナダで生まれ、幼少の頃には周防大島へ戻ってきたという。父親は福岡の人だったが、母が周防大島の出身で二人ともカナダへ移民してそこで知り合った。戦後の食糧難の時代に島であれば魚もあり、食べていけるといってカナダから周防大島へと戻ったという。Bさん自身はカナダの記憶はほとんどないが、ただ何処までもつづく広い平野と柵の向こう側に馬が走

っていた風景を何となく覚えているという。

三人兄弟の末っ子だったBさんは、中学校を卒業したあと大阪へ出て溶接の見習いをした。会社は職人もあわせて三〇人ほどで、真鍮のヤカンを作っていた。学校を出てすぐのことで右も左も分からなかったが、社長さんがよくしてくれて下宿もさせてくれた。そして仕事を少しずつ覚えていったという。

その当時、ヤカンは飛ぶように売れていた。つくつても、つくつても追いつかないほどだった。いまは全て機械でつくっているが、ヤカンの製造で最も難しいのが注ぎ口の溶接だった。これは当時の技術では人の手によるほかなかった。そして、注ぎ口がきちんとついていないとよい製品とはならず、特に技術が必要だった。注ぎ口の溶接をみれば誰がつくったかもわかった。Bさんは大阪で一ばんの職人という人がつくったヤカンをみて、どうしたら早く、いいものができるかを日夜研究した。月に三〇〇個、四〇〇〇個とつくることもあった。会社ではBさんが一ばんの腕ききになったが、どうしても大阪で一ばんという人の仕事には勝てなかった。

しかし、いい仕事をすればそれだけ給料もよかった。

当時は大学卒の人よりも給料がよく、好きな車も現金で購入し、二〇代半ばで結婚してすぐに一戸建ての家をもつこともできた。生意気な若造と見られたかもしれない、と当時を懐かしそうに振り返る。

その後、溶接の腕を見込まれて、大手の家電メーカーへと転職し、エアコンの製造の仕事をした。Bさんの腕は確かで、技術研修を受けることなくすぐに現場の仕事についた。エアコンの仕事はヤカンにくらべれば随分と簡単だった。

生産ラインを一つ任されてからは、もう残業して働くような時代でもないので、生産ノルマを出来るだけ早く終わらせるように工夫した。技術指導に東南アジアへ出向してほしい話もあったが、若い頃に仕事をしすぎたので家族との時間を大事にしたいと断った。

Bさんのもとで働く人たちは残業がないからいいと言ってくれたのが嬉しかった。若い者には出来るだけ溶接の技術を教えた。そんな若者がコンテストで上位になると、自分のことよりも嬉しかった。

会社からは定年延長の話もあり、上司からも残って欲しいとの話をされたが、もう充分働かせてもらったので

といつて、周防大島へ戻って退職金で家を建てた。

そんなとき、カナダ政府から連絡があつて、太平洋戦争時に日本人強制収容所にいた人への賠償をしたいという話があつた。また、国籍の整理もしていなかったよう
で、カナダ国籍も取得できると言われた。そんな昔の話
が出てきたのにびっくりしたが、いまさら、カナダ人にな
るわけにもいかないから、国籍取得の話はお断りして、
賠償金だけもらったという。

いまは畑の土いじりと、高校野球の観戦が楽しみだし、
部落の集まりで飲むのも楽しいと話す。

(三)

近年の周防大島町の社会動態がプラスに転じたという。
これには退職してふるさとの島へ帰る人たちの動向が大
きいようだ。ここで紹介したAさん、Bさんもそのよう
なUターン組である。お二人の話からは普通に暮らす人
たちが日本の高度成長を支えていたことを改めて感じさ
せる。

「高度経済成長とはなんだつたのか？」ということが、
ここ一〇年ほど議論されている。ふるさと周防大島へ戻
った「ご隠居さん」たちのライフヒストリーを紡いでい

けば、より立体的な戦後史像が浮かび上がるような気が
する。

おわりに

最後、どのような人たちが島外で仕事をしたのかを、
いま一度考えてみたい。はじめは、まさに生存のために
島外へ仕事も求めたであろうが、後の時代になるとより
豊かな収入を求めたと言われる。どんな人たち(例えば、
次男・三男や女性たち)が島外へ行ったのかという問題
を整理する必要があるだろうし、彼らの地元への送金の
実態と社会的な貢献にも目を向けていきたい。

長州大工研究では、職人の技術に注目することで、具
体的な人の個性が伝わってくるし、移民研究についても
聞き取りを行うことで個人のライフヒストリーを見るこ
とができる。こういった先学の視点に学びながら数字だ
けでなく人の個性にも目を向けていくことが今後重要に
なるだろう。

特に最後に紹介したような、高度経済成長期を支えた
人たちの話は、いままさに「聞き時」といつてもいいか
もしれない。有名無名に限らず、人間の営みを伝えるた

めにも、できるだけ多くの人たちから話を聞いてみたい。周防大島は特にその可能性を秘めている。その時には「人間の移動」といった大きなテーマを設けて自由に話をしてもらう、そんなプロジェクトを企画してもいいのではないかと思っている。一人ではできないことなので、できるだけ沢山の人たちとこのプロジェクトを企画していきたいらと思う。(文化交流センター学芸員)

〔付記〕本稿は平成二五年度に、周防大島商船高専高校で筆者が担当した日本史概論の授業がもとになっている。授業の機会を与えていただいた田口由香氏と学生諸氏に記して謝意を表します。

【脚注】

※1 土井彌太郎『山口県大島郡ハワイ移民史』（マツノ書店、一九八〇年）

※2 例えば、森本孝「大正五年一月発行『かむろ 第六号』に見る沖家室島民の移民動向」（泊清寺編『かむろ復刻版』第二巻、泊清寺・みずのわ出版、二〇〇二年）など。

※3 森本孝『東和町誌各論編第三巻 漁業誌』（東和町、一九

八六年）、森本孝・古賀元章『漁民社会の歴史―瀬戸内海・沖家室島の事例研究』（みずのわ出版、二〇〇二年）

※4 宮本常一『忘れられた日本人』宮本常一著作集第一〇巻（未来社、一九七一年）

※5 久賀町誌編纂委員会『山口県久賀町誌』（久賀町役場、一九五四年）

※6 宮本常一『庶民の発見』宮本常一著作集第二二巻（未来社、一九七六年）

※7 那須圭子『平さんの天空の棚田』（みずのわ出版、二〇一二年）

※8 梶田清七『わたしの浮島風土記』（私家版、二〇〇九年）

※9 小沢白水・村上岳陽『大島郡大観』（復刻版・私家版、二〇〇七年、初出は大島新聞社、一九二〇年）

※10 前掲、森本孝「大正五年一月発行『かむろ 第六号』に見る沖家室島民の移民動向」

※11 宮本常一・岡本定『東和町誌』（日本観光文化研究所編、周防大島町、一九八二年）、八三四頁

※12 前掲『東和町誌』八四七頁

循環型の「定住」を考える

山本康文

周防大島町が掲げる政策の一つに「定住促進」がある。

平成二四年四月には椎木巧町長が会長を務める周防大島町定住促進協議会が発足し、UIJターンの受入支援をすすめている。「移動する人たち」の受け皿に周防大島がなろうという取り組みである。

いま、日本の島嶼地域、中山間地域での人口減少が著しい。戦後の高度経済成長期以降、工業地域や都市への著しい人口の集中、さらに近年の出生率の低下によって、「限界集落」なる言葉も生まれた。その「限界」という言葉のもつ妥当性は置いておくとしても、島嶼部には「無人化」の危機に瀕する島もでてきた。

斎藤潤氏の広島県呉市の情島に関するレポートは興味深い。かつては人口二〇七人の島が現在七人、いずれも七〇代〜八〇代。いまイノシシの被害が絶えず、また漁獲量も減少しているという。情島では広島文化学園看護学部の研究を受入れる「発見」の島として役割を担っているという（斎藤潤「瀬戸内海の今を歩く 第四九景」『し

ま』二三五、公益財団法人日本離島センター、二〇一三年九月）。

「十年もすりやあまた人口がへって、そのうちに、いよいよ人がおらんようになるんじゃないかねえ」と言ったのは、同じ島名の周防大島町情島の老人。その一言が頭をよぎる記事だった。

「無人化」の危機は単に一地域の局地的な問題ではなく、日本の重要な課題と言っている。文化交流講座で講演された離島政策文化フォーラム事務局の大矢内生氣氏が、「事業仕分けのなかで、島なんか海に浮かぶ老人ホームと、とんでもないことを言う人がいました。しかし島で人が普通に暮らす、これが一ばんの『防衛』です。海はつながっていますから、外海と内海に関わりなく海岸線はみんな国境線ですし、漁師の人たちが普通に漁業を営んでいることが海の安全にもつながるんですね」とおっしゃったのを思い出す。

そして、いま外資による投機目的の土地買収が各地で問題となっているが、いずれも耕作放棄地など所有者が土地への関心が薄らいでいるところを買収されているようだ。「マネー」による侵攻といってもいいかもしれない。

ペーパーカンパニーを使った土地取得は、行政にとっても道路をつくったりする地域開発にあたつての障害になリかねないし、何より突然集落の真ん中に境界杭とバリケードが築かれるということもあり得る話だ（平野秀樹『日本、買います―消えゆく日本の国土』新潮社、二〇一二年）。これは遠い北海道の水源池や新潟の市街地の話ではなく、平野氏によれば対岸の柳井市でも外資によつて買収された土地があるという。

では、どうすれば「人が普通に暮らす」ことができるようになるのだろうか。ここで考えてみたいのは就業や福祉といった具体的なことではない。それを生み出すための土地への愛着という問題である。

考えてみれば、周防大島の先人たちは日本各地へ出向き、あるいは海外へ雄飛し、技術を売つて稼ぎ、そしてふるさとへ帰るといふ人が少なくなつた。外の世界を見て、その見聞を持ち帰り、ふるさとと広い世界を結びつけ、また子供たちは外の世界を見たいと思うようになった。

「出稼ぎ」の島にあつて住みつづけるだけが選択肢ではなく、一度はふるさと以外の土地で暮らすことで、そ

の資源や課題というものも考えることができる。

地縁・血縁をもっている人、あるいはそれを作つていく人、さらに幼少期・少年期をその土地で過ごした、いふなれば周防大島を「ふるさと」として感じられる人に「定住」して欲しい。

東京から大島を訪れた友人が「海の青に、山の緑、子育てするにはこんないい環境はないよね」という。ＩＴの人たちには、ここを「ふるさと」としてもらい、子供たちがまた将来にわたつて子育てに戻つてくるような環境をつくらなければならない。

我々はどれだけ地域を知っているのだろうか、またどれほど地域の人を理解しているだろうかを考え、周防大島の歴史や文化というアイデンティティーを継承していくためにも、家庭・学校・地域のそれぞれの場での教育のあり方を考えていかなければならない。「ふるさと」はただそこにあるだけでなく、私たちが作り、そして継承していく循環のなかで育まれるものなのかもしれない。

周防大島文化交流センターがそんな取り組みの一端を担うことが出来ればと思う。

【書誌紹介】

職人たちの生き様を追う

・長州大工調査ボランティア編

『周防大島の建築文化① 長州大工の足跡』

（周防大島町文化振興会、二〇〇八年）

腕一本で世間を渡り歩いた故郷の先人たちの誇りのようなものが感じられてくる。

本書は、坂本正夫著『東和町誌 資料編一 長州大工』

（山口県大島郡東和町、一九九三年）を受けて出された「長州大工」研究の続編的位置づけともいえるべき書である。

坂本氏は、昭和八年（一九三三）高知県生まれの民俗学者で、長年、長州大工の足跡を調査・研究されてきた「長州大工」研究の第一人者ともいえるべき方である。坂本氏の言葉を借りれば、「長州大工」とは、「山口県周防



大島から四国山地の村々へ出稼ぎに来ていた大工職人に対する土佐での呼称」であるという。きつかけは、生活苦から逃れるための出稼ぎ

であつたが、彼らは四国の山の中に分け入っていき、勤勉な仕事ぶりや確かな建築技術で次第に現地の人々の信頼を勝ち取っていく。中には、仕事で訪れた土地の人々に優れた大工の技術をも伝え、土地の娘と結婚して定住した者もいたようである。大地に水が浸透していくがごとく「長州大工」は四国へ溶け込んでいった。

本書には、坂本氏の他、犬伏武彦氏、宮本光氏の各論考が収められている。

「講義録 長州大工の足跡を辿って―周防大島と土佐を結ぶ―」は、坂本氏が平成一七年（二〇〇五）に安下庄高校（現周防大島高校）にて中高生を対象に行った講義の中から「長州大工」に関する部分を抜粋したものである。内容は、著者と「長州大工」との出会いに始まり、その成り立ちや実態、活躍ぶりについて分かりやすく語られている。

「伊予・愛媛における長州大工の足跡」は犬伏氏の研究成果の一端をうかがわせる論考である。犬伏氏は、松山東雲短期大学で教鞭を執りつつ、長年にわたって愛媛県内の民家・古建築の調査研究、保存修復工事に従事してきた。現在は愛媛県建築士会文化財委員長を務められ

ながら「長州大工」研究を続けられている方である。本稿は江戸後期から大正時代にかけ伊予・愛媛県内で活躍した「長州大工」の実像に迫るものである。活動時期、出身地、携わった建築物・彫刻など詳細な分析がなされ、職人として彫り物に生きる道を見いだした「長州大工」たちの苦闘の歴史を浮かび上がらせている。

宮本氏執筆の「長州大工 門井家の人々」は、周防大島町西方出身の長州大工・門井家歴代の仕事ぶりに焦点をあてた論考である。門井家宮大工が四国（主に愛媛・高知県）や故郷周防大島で携わった寺社建築や彫り物を丹念に調べあげ、その特色などに言及されている。

本書は、もちろん「長州大工」研究の基礎的文献としての価値が高い。ただ、それだけでなく、私には江戸後期く大正という激動の時代に故郷を飛び出し、ノミ一本、ノコギリ一本を手にも、すぐれた腕だけを武器に四国という新天地に挑んだ名もなき職人たちの生き様の記録のようにも思える。（山根）

ハワイ移民の歴史を紐解く

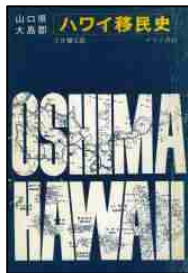
・土井彌太郎著『山口県大島郡ハワイ移民史』

（マツノ書店、一九八〇年）

周防大島のハワイ移民の歴史を知ろうとすれば、まずはハワイ移民資料館へ行き、そしてこの一冊を手にとることからはじめなければならないだろう。本書には周防大島のハワイへの出稼ぎの歴史がまとめられている。

日本とハワイ間の移民制度をめぐる交渉過程、官約移民から自由移民の時代への変遷、移民者の生活実態、さらにカウアイ島との姉妹島提携にいたるまでの経緯が、文献資料を中心にしながら記されている。

初期のハワイ移民の多かったのが広島県、山口県、熊本県である。著者は、その要因として外務卿・井上馨―三井物産社長・益田孝―ハワイ国総領事・アロウインのつながりを指摘する。アロウインは、井上馨も設立に関



わった三井物産の顧問に名を連ねており、移民について当時の三井物産社長・益田孝に相談をもちかけた。益田は福岡・熊本・山口・

広島に社員を派遣して実務を担い、特に広島、大島郡の人びとを推薦したという。そしてデフレ不況も影響して多くの人びとがハワイへ渡ることとなる。

大島郡からの渡航者は、官約移民開始の一八八五年から同制度が終了する一八九四年の一〇年間に三九一三人にのぼった。これは山口県下からの渡航者一〇四二四人の約三七%、全渡航者一九〇八四人の約一三%にあたり、大島郡出身者の占めた比重を物語っている。こうした基本的な数字がまとめられているのも本書の特徴である。

また、郡長布達や出稼人心得書、当時の新聞記事などの資料が多数、翻刻・掲載されていて、それは多少の読みにくさを伴っているが、当時の空気を感ずることができ、資料集として読むこともできるだろう。だから研究者にとっても本書が大いに参考となることは間違いない。

また、移民者たちの送金による郷土への貢献を指摘する。出稼ぎによって蓄えられた資金は個人の借金返済や家屋の建て替えに回されただけでなく、寺社の整備や小学校の教材寄贈など社会的貢献は大きかったという。この点についての詳述はないが、『大島郡大観』によれば、

大正六年の在外国者の送金額は五〇万円を超えている。私自身、大島商船の校舎新築時の寄付金送付の資料や、学校・神社仏閣の碑文などにハワイの人びとの名を見る
ことが少なくない。

姉妹島提携から五〇年を経た現在、いま一度大島とカウアイ島、ハワイとの関係を確認し、これからの五〇年の繋がりをより深いものにするためにも本書を手にして
みてはどうだろうか。（高木）

【論考】

亥の子に関する覚書

はじめに

山根 一史

『日本国語大辞典』（小学館、一九七三年）によれば亥の子は以下のように説明されている。

「陰暦一〇月の亥の日。この日の亥の刻に新穀でついた餅を食べて祝う。宮廷行事として平安初期から行なわれ、内蔵寮（くらりよう）より餅を奉る。中世以後特に盛んになる。また、後世、民間では収穫祭の日として、新穀の餅をついて食べあい、子供たちがわら束や石で地面を打ちまわる。万病をはらうためとも、イノシシの多産にあやかった子孫繁栄のまじないともいう。近世、この日から炉、こたつを開き、火ばちも出す習慣があり、宮中では上中下の亥の日、民間では平安時代には上の亥の日、中世以後には中の亥の日に主として行なった。」

二〇一三年、一月五日、火曜日は今年最初の亥の日であった。午後五時頃、森野地区（以下森野と表記）の小中学生が文化交流センターの玄関先に現れ、亥の子を搞いた「写真」。私も幼い頃、船越地区（以下船越と表記）

で亥の子を搞いた経験がある。しかし、その日見た森野の亥の子は何から何まで初めて見るものであった。

子供たち一人一人がわら鉄砲と呼ばれる茶筌状のわらの束を持ち、それを地面に叩きつけながら、参加者全員で声を大きく張り上げながら亥の子唄をうたっていた。内容はよく聞き取れなかったが、大黒舞の唄（後述）ではなかったであろうか。

森野は、明治三二年（一八八九）から昭和三〇年（一九五五）に東和町が成立するまで神浦や和佐地区と森野村を形成していた。



文化交流センター前で亥の子をつく子供たち

一方、私が幼少期を過ごした船越は、明治二二年から昭和三〇年まで家室西方村（昭和六年に白木村に改称）に属していた。森野と船越は一時期までは違う村であった。しかし、両者は地理的にも近く、距離にしても

数キロしか離れていない。それなのに森野の亥の子は、私が知っている亥の子とはかなり様子が違っていることに衝撃を受けた。

このことをきっかけに周防大島（以下、大島と表記）の亥の子について若干の興味を覚えた。そこで本稿では、本町出身の民俗学者・宮本常一（一九〇七—八二）が著した論考や私の幼少期の亥の子体験等をもとに、大島に伝承されてきた亥の子行事の変遷について考えてみたい。

一章 明治と昭和二〇年代頃における大島の亥の子

大島にいつ頃から亥の子行事があつたのかはよく分からぬ。

天保年間（一八三一—四五）に編まれた『防長風土注進案』の西方村の項に「十月亥ノ日 農家は一同雑穀杯を以て搗候て神仏江供へ、来歳之豊作を祈候」とあり、油宇村の項に「十月亥猪（げんちよ）は銘々思寄ニ神仏ニ神酒供物等仕候、百性（姓）分之者は少々宛餅を搗申候」と見える。

また、小澤白水・村上岳陽著『大島郡大観』（大島新聞社、一九二〇年。二〇〇八年、私家版として復刻）に

是天保年間の沖浦村の年中行事の十月の部分に「初亥の日には荒神が野より家の内に還御さるゝと称して、銘々餅を備えて神祝ひといふをする」とある。

これらのことから少なくとも、江戸後期には大島にも一〇月の亥の日に餅を搗き、それらを神仏に供えて豊作を祈る風習があつたと思われる。

明治以降の大島の亥の子については宮本の論考に詳しい。亥の子について触れた論考はいくつかあるが、管見の及ぶ限り特に大島の亥の子について取り上げたものとしては主に以下のものが挙げられる。

■「婚姻習俗」

『旅と伝説』六巻一号（三元社、一九三三年）。のち『宮本常一著作集40 周防大島民俗誌』（未来社、一九九七年）に所収。

■「山口県大島郡の子供行事」

『近畿民俗』一卷五号（近畿民俗学会、一九三六年）。のち「子供行事」と改題して『宮本常一著作集40 周防大島民俗誌』に所収。

■「収穫日記」

『民間伝承』一三巻三号（民間伝承の会、一九四九年）。

のち『宮本常一著作集40 周防大島民俗誌』に所収。

■ 「亥の子行事—刈上祭—」

『民俗学研究』第二輯（日本民俗学会、一九五一年）。

のち『宮本常一著作集9 民間暦』（未来社、一九七

〇年）に所収。

■ 「久賀の年中行事」

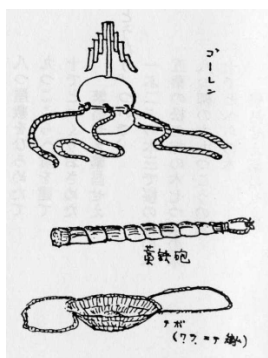
『山口県久賀町誌』（山口県大島郡久賀町、一九五四年）。

のち『宮本常一著作集40 周防大島民俗誌』に所収。

■ 「村の一年」

『東和町誌』（山口県大島郡東和町、一九八二年）。

のち「山口の年中行事」と改題して『日本の年中行事』（八坂書房、二〇一二年）に所収。



【図1】 出典：宮本『周防大島民俗誌』

以下、これらの論考をもとに明治～昭和二〇年代頃までの大島の亥の子について見てみたい。

亥の子は一〇月の亥の日を祝う行事で、子孫繁栄・無病息災を祈願する側面と、一年の仕事を終えた山の神を家の神棚に迎え入れる儀礼としての側面があったという。後者について宮本は「私の故郷では亥の子の日には家の前の菜畑へはいらぬ。これは山の神が前の畑まで帰っているからであると村の人は考えている。さて家々では土間の隅の荒神棚にお燈明をあげて、夕方になると山の神のおかえりを待っている」と述べている。

家の前の畑まで帰っている山の神を神棚に迎え入れるために行なうのがゴレン（五輪石）や藁鉄砲による地搗きである。ゴレンとは、丸い石に綱をつけたもので、藁鉄砲とは、藁を縄などで巻いて棒状にしたものである。〔図1〕

行事の担い手は、当初はヘコ祝〔※1〕を終えた「小若衆（こわかいし）」と呼ばれる一三歳の少年たちを中心とする男の子たちであった。「山口県大島郡の子供行事」（以下「子供行事」と表記）には「小若衆」が子供の参加する行事を牛耳り、これらの行事に正式に参加するこ

とのできる者は「旧幕時代にはだいたい寺子屋にいつて
いるもの、明治以後では小学校へいつてゐる子であつた」
としてゐる。

昭和二〇年代頃の亥の子当日の様子が詳しい「収穫日
記」には「今までは一五歳の者が大将株であつたが、六
三制になつてから昨年は一三歳の者が大将になり、中学
生は参加しなかつた。今年は中学生も一五歳までの者は
仲間に入り、これが大将株になるのだという」とあるこ
とから、次第に行事の担い手も一五歳以下の男児にまで
対象が引き上げられていつたものと思われる。

また、大正時代の白木村の行事について述べた「村の
一年」には「藁鉄砲は女の子や小さい男の子が使用」と
あり、先述の「収穫日記」にも三人の女の子が宮本家に
亥の子を搗きに来る場面があることから、のちに女兒も
参加する行事になつたと考えられる。

亥の子は集落内をいくつかの組に分け、それぞれ担当
する区域が決まつてゐた。久賀地区では、集落の境で他
集落の組とけんかを起こし、互いの亥の子を奪い合うこ
ともあつたという。

行事そのものについては「婚姻習俗」に最も詳しい。

これによると（一）（六）の順で唄がうたわれていた
ようである。

（一） お家の繁昌祝い込め祝い込め

（二） 大黒舞の唄「※2」

大黒様の行業ぎょうごう（状）にやア

一に俵をふんまえて

二につくり（につこり）笑うて

三に酒をつくつて

四つ世の中ええ様（よいよう）に

五ついつもの如くに（て）

六つ無事（無聊）息災に

七つ何事ない様に

八つ屋敷をひろめたて

九つこころへ（に）倉をたて

十でとつくりおさめた

繁昌せえ繁昌せえ

（三） 数え唄

一ぶ二ぶの木三で桜の椎の木

五葉の松の棕の木七つ梨の木

八つ柳の木九つこうの木

十でとべらの木

繁昌せえ繁昌せえ

(四) 伊勢音頭

(何種類かあるが、ここでは代表曲を記載。)

ここは櫛が浜、尾のない狐、

わしも二、三度だまされた

これのおかかは団子か餅か、

餅は餅じゃが金持ちじゃ

天のお星さまかぞえてみれば数万九つ百七つ

(五) これの家の、

何某(男の名前)の嫁に誰がよかろう

何某(似合いの女の名前)がよかろう

テボ「図1」へ三杯ウジがわくほど

よう似合うた、よう似合うた、

ヨイセイ、トーコーセイ

(六) 亥の子餅をつかんものは

鬼をもうけ蛇をもうけ

角の生えた子をもうけ

これを見る限り、行事自体かなり長く複雑な構成であ

ったようである。

「婚姻習俗」に登場する亥の子行事が具体的にいつ頃の年代のものについて述べたものなのかははっきりとしない。ただ、本論考が収録された『旅と伝説』六巻一号が昭和八年(一九三三)に発表されていることを考えると、大正と昭和初頭頃を対象にしたものではないかと推測される。

宮本によれば、初めからこんなに複雑だったわけではなく、かつて男の子は(四)+(六)、女の子は(五)+(六)の唄のみをうたっていたという。それが、今から

五〇年前「※3」までは大黒舞の唄はうたわれなかったが、神舞「※4」が減びてから「大黒様の行業にや」というのがうたわれるようになったと指摘している。

行事が終わると、年役の者が「おばさん祝うてつかされ」といって祝儀をもらいに家へ入る。祝儀はお金やミカンであったが、祝儀をもらえないこともあった。その時は「貧乏せえ貧乏せえ」といってその家を立ち去ったという。

なお、祝儀について「婚姻習俗」には「多い家であれば一〇銭、少ない家で一銭」、「收穫日記」には「一人が

「円ずつ」という記述があり、時代ごとにある程度相場が決まっていたと考えられる。

以上が亥の子行事の大きな概略である。しかし、時代を経るにつれて亥の子行事は変化を遂げていった。それは次に挙げる「収穫日記」の宮本の記述からもうかがる。

(a) 「近頃はけんかするようなことはない」

(b) 「去年は夜映画があるとかいって、昼間にイノコをついてまわった」

(c) 「夕方、亥の神様が戻ってくるといって前のサエン畑へは絶対に入らなかったのだが、そしてまた神棚に灯明をとぼしてつつましい気持ちで夜を迎えたものだったが、そういう風はなくなっている。そしてまたこの日は必ずコタツをあげたのだが、今年はそんなこともしない」

(d) 「私の子供のころには『祝いこめ祝いこめ、お家の繁昌祝いこめ』と最初にいったものだが、今『いざやったいざやった、亥の子様がござった』という大黒舞うたになる」

(a) からは、かつての子供たちの荒々しさが時代と

ともに失われ、(b) からは担い手である子供たちの都合によって亥の子Ⅱ夕方開始という原則が容易に変えられてしまう事実が見受けられる。

宮本は「亥の子行事―刈上祭―」の中で、亥の子は【1】一〇月の亥の日を祝う、【2】作神様を祀る、【3】餅をつく、【4】土を打つ、【5】炬びらきをする、の五つの要素から構成される行事であると述べている。しかし、

(c) からは、昭和二〇年代の大島では、【2】や【5】の要素が薄れ、行事そのものが変質してきている様子うかがえる。私が思うに、これらの変化は時代の変遷とともに亥の子行事の意義や神聖さが失われ、子供たち主体のイベント化していったためではないかと考えている。

第二章 私の亥の子体験

この章では、私が小学一年生〜中学三年生の時、実際に経験した船越の亥の子行事の様子について述べてみたい。年代でいうと昭和六三（一九八八）〜平成八年（一九九六）頃にあたる。

実施されたのは、一一月の亥の日。年によって月に二〜三回あった。

船越の亥の子は、私が小学生の頃までは、集落内の小学一年生から中学三年生の男児を対象とした行事であった。しかし、子供の減少もあり、途中から女子中学生も亥の子に参加するようになった。ただし、そのようになった明確な時期は覚えていない。

亥の子には、頭屋があった。頭屋は当番制で任期是一年。年長の者から年少の子に代々受け継がれ、一度頭屋を務めれば二度とまわってくることはなかった。頭屋の家には任期中、厨子（天神様か）、亥の子石、一基、木箱（二箱ぐらい？）に納められた文書類等を保管する義務があった。一度、木箱の中身に興味を覚え、中をのぞいたことがある。幼少期の記憶でうる覚えではあるが、文書には大正の年号が入ったものもあったように思う。

行事は、だいたい夕方一八時頃から始められた。その年の最初の亥の日の時だけ、亥の子石にお神酒をかけ、石を搗く子供たちはお神酒を少し口につける風習があった。昨今では、当然子どもは飲酒は禁じられているが、古くは実際にお神酒を飲んでいたのではないかと思う。

船越の亥の子は、東西の二組にわかれて担当区域の端の家から搗き始める。東西の境界は、集落の南北を貫く

町道によって分けられていた。

「舞いこんだ、舞いこんだ、福の神が舞いこんだ」と二〜三度唱えながら、民家の庭先に入る。家の人たちが掛け声に気づいて玄関に出てくれば、いよいよ行事の始まりである。

ただし、最初に注意すべき点があった。基本は玄関先の土の部分に搗くのだが、家によっては玄関先がコンクリートになっていたり、水道管が埋まっているケースがある。そのため搗く前に、まず家の人に亥の子を搗く場所や搗き方を確認した。時には「軽く搗いてくれ」とか「亥の子は搗かずに滑らせてくれ」といった要望をうけることもあった。

亥の子は、石に綱がついたタイプのもので、綱は六本くらい。綱一本一本に子供一人がつき、それを引きながら年長の者が音頭をとり、その他の子供たちは時折掛け声を入れながら搗く。唄は一軒につき、三〜四曲程度であった。昭和六三〜平成八年頃、船越でうたわれていた亥の子唄は「表1」の通りである。

唄はすべて、宮本がいうところの伊勢音頭にあたるものと考えられる。当時は、意味もあまり考えず、ただう

表1: 船越地区における亥の子唄一覧

No.	唄の内容
①	沖が暗いの、(ヨイヨイ)、白帆がよう見える、(ヨーイセードッコセー)、あれは紀の国 ヨイソリヤーみかん船、(千両箱ヤードッコセーヨーイヤノ、アイヤイセーコーリヤイ セー、サッサーナンデモセー)
②	ここのお坊ちゃん[お譲ちゃん]、(ヨイヨイ)、団子かよう餅か、(ヨーイセードッコセー)、 餅は餅でも大金持ちじゃ(千両箱ヤードッコセーヨーイヤノ、アイヤイセーコーリヤイ セー、サッサーナンデモセー)
③	ここの座敷は、(ヨイヨイ)、祝いのよう座敷、(ヨーイセードッコセー)、鶴と亀とがヨイソ リヤー舞を舞う(千両箱ヤードッコセーヨーイヤノ、アイヤイセーコーリヤイセー、サッ サーナンデモセー)
④	桜三月、(ヨイヨイ)、アヤメはよう五月、(ヨーイセードッコセー)、咲いて年とりやヨイソ リヤー梅の花、(千両箱ヤードッコセーヨーイヤノ、アイヤイセーコーリヤイセー、サッ サーナンデモセー)
⑤	天のお星様、(ヨイヨイ)、数えてよう見れば、(ヨーイセードッコセー)、九万九千七百七 (ホンマカヤー、ドッコセーヨーイヤノ、アイヤイセーコーリヤイセー、サッサーナンデモ セー)
⑥	猫がネズミ取りやあ、(ヨイヨイ)、イタチがよう笑う、(ヨーイセードッコセー)、イタチ笑う なヨイソリヤー猫商売、(千両箱ヤードッコセーヨーイヤノ、アイヤイセーコーリヤイ セー、サッサーナンデモセー)
⑦	船が出る出る、(ヨイヨイ)、煙がよう残る、(ヨーイセードッコセー)、残る煙は福の神、 (ホンマカヤー、ドッコセーヨーイヤノ、アイヤイセーコーリヤイセー、サッサーナンデモ セー)
⑧	山で赤いのは、(ヨイヨイ)、紅葉かよう椿、(ヨーイセードッコセー)、まだまだ赤いのは 猿のケツ、(ホンマカヤー、ドッコセーヨーイヤノ、アイヤイセーコーリヤイセー、サッ サーナンデモセー)
⑨	山で寝るときや、(ヨイヨイ)、木の根がよう枕、(ヨーイセードッコセー)、落ちてくる木の 葉が掛け布団、(ホンマカヤー、ドッコセーヨーイヤノ、アイヤイセーコーリヤイセー、 サッサーナンデモセー)

※唄のNo.は50音順。

※()は斉唱。なお斉唱部の「千両箱」は「万両箱」という言葉によく置き換えられた。

特に明確な使い分けの基準はなかったように記憶している。

たっていたけどだったが、今見返してみるとなかなか面白い。

①は、江戸時代、嵐の中ミカンを江戸まで運んだエピソードで有名な豪商・紀伊国屋文左衛門についてうたったもの。

⑧や⑨は、ユーモアのきいた唄である。それは最後の掛け声に「ホンマカヤー……」とある点にもそれがよく表れている。今でいうお笑いの「ノリツツコミ」のようにも感じられる。⑧の唄は、その中でも当時の船越の子供たちに大人気の唄だった。

しかし、私自身、一番思い入れがあるのは⑤の唄である。なぜなら、私が一番最初に覚え、最初に音頭をとった唄でもあるからである。初めて音頭をとった時期は正確には覚えてないが、小学三〜四年生頃ではなかったかと思う。年長者よりうたうように諭され、この唄をうたった。以後、この唄は私の持ち唄のような扱いになり、暗黙の了解のもと優先的にうたわせてもらった。

伊勢音頭のあとは大黒舞の唄で締めくくる。唄の文句は前章で挙げたものとほぼ同様だが、若干の違いがあった。

大黒様のぎょうじ（行状？）にや

一のたらふんまいて

二でにつこり笑うて

三で酒をつくつて

四つ世の中ええように

五ついつものこの如く

六つ無病息災に

七つ何事ないように

八つ屋敷を広めたて

九つこころで倉をたて

十でとっくりおさめた

まめなように達者のように

繁昌せえ、繁昌せえ

行事が終わると、年長の会計役が家の人から祝儀（お金）を受け取る。私の時代では一軒あたり五〇〇円〜一〇〇〇円ぐらいが相場であったように記憶している。

以上が私が体験した亥の子行事の概略である。

しかし、船越には亥の子に関連した行事がもう一つあったことを強調しておきたい。それは「天神待ち」【※5】

である。「天神待ち」は旧暦一月二五日に船越や久賀で行われた行事で、船越では、頭屋は一年に一回クジで決め、頭屋になった家では天神様の厨子を祀り、天神待ちの日には宿をしたという。「天神待ち」について、宮本は「子供行事」の中で以下のように説明している。

「天神待ち―二四日の日、子供らが集まって、笹をきつてき、これに五色の短冊をきつてつけ樽につける。年長者は米を集めてまわる。当日は昼集まって頭屋で食べ、短冊をつけた樽をかつぎ、歌を唄いながら村をまわる。夕方戻ってきて、頭屋で夕飯を食べ、次の頭屋をクジできめ、その家へ厨子を持っていく。するとその家は一年間少年団の世話をする」

私の時代にも「天神待ち」の行事は残っていた。ただし、宮本の述べたものと行事の様子はかなり異なっていた。

日にちは一月五日頃。午前一〇時頃に、亥の子の頭屋の子の家に集まり、昼食（カレーライス）、夕食（焼肉）と一緒に食べ、夜まで一緒に過ごすというものであった。食事以外の時間は特に何かをするというわけでもなく、テレビゲームや缶蹴り、時には肝試しをしたりしながら

遊んでいた。これらの行事にかかる費用は亥の子の祝儀で賄われ、残ったお金は亥の子に参加した子供たちに分配された。一部のお金は小学校に寄付金のようなかたちでも納めていた。

「子供行事」には、「天神待ち」には頭屋があつたが、亥の子には頭屋はなかった、と述べられており、もともと二つの行事は全く別物で相互のつながりはなかったのではないかと思われる。しかし、私たちの時代には、亥の子の頭屋＝天神待ちの頭屋も兼ねるようになり両者は混合されて一連の行事として伝承されるようになったのではないかと考える。それは亥の子の頭屋が亥の子石とともに厨子の管理も請け負っていた点からも推測される。「天神待ち」については、当時の私自身も、何かの伝統行事というよりは単に亥の子の祝儀の分配のための集まりという程度の認識しか持っていなかった。こうして本来別々の行事であつたものが、時代とともに一本化・合理化され、宗教的・儀礼的な側面が削ぎ落とされていったのである。

おわりに

森野の亥の子を見たことをきっかけに大島の亥の子の変遷について考えようと軽い気持ちで書き始めた。悪戦苦闘しながらも、この機会に明治・平成初頭の大島の亥の子について概観できたことは私にとってそれなりに意味があったように思う。宮本の論考をもとに、幼少期の実体験と照らし合わせながら、亥の子という行事が本来どんな意味を持ち、どんな変遷をたどってきたのか、考えさせられるきっかけになった。

宮本は「古い年中行事がほろびるのは、日が変更になったり、生産活動に大きな変化がみられるときである。そして行事がほろびると、われわれの記憶からも消えていく」と指摘している。広島県では、第二次世界大戦中の中断や地打ちが道路のアスファルト舗装や庭先のコンクリート叩きをいためるという理由で亥の子行事が絶えた地域があるという。【※6】幸い、大島ではカタチを変えながらも亥の子は廃れず現在まで受け継がれている。自然と同じで年中行事も一度廃れてしまえば容易に復活させることはできない。文化交流センターに勤務する者として、代々行事を受け継いできてくれた故郷の先人た

ちに感謝しながら、こういった行事を記録し、後世に引き継いでいかなければと思う。

もちろん、変遷をたどるという視点でいえば、現在の視点、つまり平成二五年現在の亥の子について言及できなかった点は大いに反省すべきである。この点については今後の課題とし、機会があればいずれかの折にまとめてみたいと考えている。

〔脚注〕

※1 名付親が一三歳になった男の子に六尺の白木綿、女の子に赤い腰巻を贈る風習。その日は赤飯を炊いて、近所の女性を招きふるまったという。

※2 『日本民俗大辞典』（吉川弘文館、二〇〇〇年）には、「門付芸の一つで、室町時代に始まり、江戸時代に盛んになった。（中略）大黒を模した姿で門戸に立ち、新年嘉祝の詞を唄い舞うもの」と説明されている。

※3 いつから見て五〇年前かというのが問題になる。仮に論考が発表された一九三三年を基準とすると、その五〇年前は一八八三年（明治一六）にあたる。

大雑把に見積もって明治一〇年代頃に大島の亥の子に一つの画期があったと考えられないだろうか。

※4 「婚姻習俗」には「霜月一五日に鎮守社で神舞（寒舞）というのがあった」とある。『日本民俗大辞典』

によれば、神舞とは「鹿児島県と宮崎県諸県地方もろかたの

神楽のこと」で「舞と音楽を合わせて神楽と呼ぶのに対し、神舞という言い方は、舞が音楽と区別されたことの名残」と説明されている。「明治以後、総じて消滅の一途をたどっている」とあり、宮本の記述とも合致する。

※5 他地域でいう「天神講」にあたる行事と思われる。

『日本民俗大辞典』には「一月・二月ごろ、子供の仲間によって行なわれる講。（中略）特に関東地方から長野県、山梨県、静岡県東部・伊豆地方に濃厚に分布（中略）十五歳を上限とする子供が宿や天神社などに集まり、食事をして遊ぶ」とある。大島でも久賀地区では「天神講」と言っていたようである。

「テンジンコウ 一月二五日。前夜の二四日に集まる。当家へ初穂を持ってゆき講をした。これは有志

によって組まれているが、家々で天神様をまつる風はあった」（『久賀の年中行事』より）

※6 「年中行事」『広島県史 民俗編』（広島県、一九七八年）。のち「広島の年中行事」と改題して『日本の年中行事』に所収。

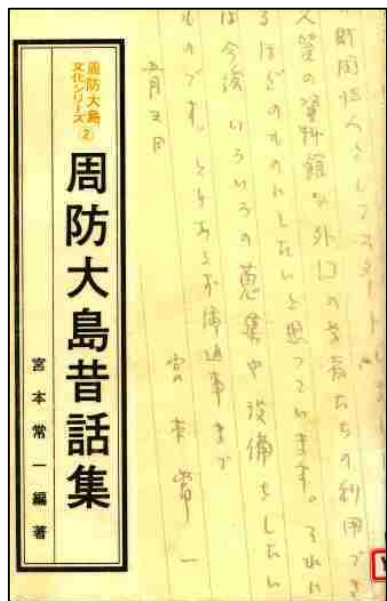
瀬戸内で聞いた船大工の唄や話

戎谷 和修

一 はじめに

久賀歴史民俗資料館には、宮本常一と旧久賀町の方が情熱をかけて収集した民具が保存されています。今回の物づくり企画展「船大工用具と木造船」では、そんな民具などを多くの方や様々な施設などの協力で展示することができ、大勢の方の前に披露が出来たのは大きな喜びです。

「周防大島昔話集」の表紙〔写真①〕は、宮本常一先生の自筆の手紙が掲載されています。ちよつと読みます



写真①：『周防大島昔話集』表紙

と、「久賀の資料館も外国の学者たちの利用できるほどのものになりたいと思っています。それには今後いろいろの蒐集や設備をしたいものです」とあります。宮本先生の意気込みとともに地元の方々の気持ちがこの表紙になったと思っています。

さて、私達がこの施設を引き継いで六ヶ月が経ちました。だいたい千人の方が訪れて下さいました。そして、最近では地元の方も色々な企画展にお見えになられるようになり、喜んでいきます。今日は瀬戸内海各地で聞いた唄や木造船、船大工や海の大まかな話題について話したいと思います。

二 少なくなった木造船と船をつくった話

最初にお断りしますが、私は木造船や大工道具の知識はほとんどありません。興味を持った唄や聞いた話を紹介して責めを負わせていただきます。

それにしても、木造船は少なくなりました。下関市蓋井島では「木造船は吉見や豊浦町でつくったが、昭和四十年頃からプラスチックが流行ってね。今は皆プラスチックですよ。船虫はつかんし、プラスチックじゃったら

三 ひょうたん節の話

そこで早速、沖家室の船大工さんを訪ね、棟梁の古谷常尊（直）？さんに唄とお話を聞きに行きました。

古谷さんは「新造船進水の祝いの席の最初、船大工の棟梁は『新造おろして浮きなりよ見れば・』と必ずひょうたん節を歌いました。この唄が出るまで他の唄は歌えないのです」と話され、「船卸し祝いの席ではひょうたん節を必ず歌います。また、正月二日の乗り初めはお客さんの家と呼ばれて、十一日のおおだま祝いはお返しにお客さんと呼んで歌います」といつ歌われるかも具体的に教えて下さいました。

お聞きした唄の歌詞は、

「新造つくりて 荷にや何を積もうか こぶをお積みや
れよよろこぶを おもしろや ヨーローマ ヒョウタン
カ エートモ エートモ」

です。また、その時、沖家室八木岩正さんには「木挽はいたんです。ここは船大工が多かったでしょう。大きな丸太をね、大きな鋸でひいてわくのは木挽きだったんです。のこでもこんな大きな鋸があるでしょう。製材所で、かすかに木挽き唄を聞いたのを覚えています」と伺いま

した。木挽きさんが山の中だけでなく、造船所にも居たのに驚いたことも思い出します。

ひょうたん節は各地で聞きました。広島県の倉橋では、「ここで唄が始まったんです。父親から聞いたところによると、「いろは」の順番に造船所が並んでおったという具合です（四七文字、たくさんあるの例え）。酒盛りがあると、最初にこの唄が出ます。祝唄とか船上せ唄（ふなのぼせ）とか言いますがね。昔はろくろで船を上げましたからね。船をろくろを巻きながら引き上げる、その時歌ったりしたんでしょう。NHKが来ましてね。録音したこともあるんですよ。私は船上せ唄とは隔たりがあると思いますね。というよりは祝唄がいいと思いますね。船上せでは状況に合いません。ひょうたん節ともいいますね。昔はこの唄が出るとね。次に磯節とか安来節とかやるんですが、最初の唄がこれですよ。お父さんののを聞きながら覚えたもんです。」と植崎博司さんに唄とともに聞きました。歌詞の二番目までお聞き下さい。

「うれしめでたの若松様は

枝も栄えて 葉も茂る おめでたや

イヨーローは ひょうたんじや

アー エトモ エトモ

「新造おろして 浮かべてみたら

ソリヤ

沖のかもめの 浮き姿 おめでたや

イヨローは ひょうたんじや

アー エトモ エトモ

変わっているのは、「この新造船のお祝いでは、どんなに寒くても船主（ふなぬし）を海に落とすんです。」と聞いたことです。船主になるのも大変ですね。

県内ではどこも節は大体同じです。下関市でも西山の本田幸則さんが「下関の結婚披露宴、祭り、漁船の起工式、船卸し等、めだたい席では必ず歌われた」と紹介して歌った船唄もひょうたん節でした。お聞き下さい。

その歌詞は、

「この床の間にや千両箱つんで

鶴と亀とが舞を舞うおもしろや

ひょうろはひょうたんじや

アエートモ エートモ

です。

本田さんはひょうたん節と呼ばれ、各地で歌われた唄

と聞いて、「同じ唄が下関市以外の他でも歌われていたのでびっくりしました」と話されました。

また、下関では歌詞が二通り有り、米という意味で兵量、それから、養老の滝とか言いますが長寿の意味で養老と両方歌う人がいるそうです。その他、「自宅で行われた結婚披露宴などの祝い事はほとんど自宅で行われた」とか「木造船も昭和四十年代には盛んに建造された。下関市西山には八木造船と登根造船とがあった」などの話も聞きました。

四 瀬戸内海は物と文化と情報の大動脈

松山市中島町では「二神島の方でも沖家室の釣り針を使っていた」とか、防府市野島では「沖家室に釣り針を買いに行つてね、今でも使っています」など、沖家室の釣り針がよいという話を各地で聞きました。色々な情報は瀬戸内海では共有されています。そして、それらの情報は瀬戸内海を色々な船によって伝わっていきます。

例えば、「広島県豊田郡木江（きのえ）の船です。部品などは大崎木江の資料館に寄付したといふたが、行商に船で来よつたがの。大阪から九州にかけて、大工道

具やボルト等の材料を卸しての」とかの話を聞きました。そんな話を各地で聞きました。船の影響は大きかったようです。

その船は、まきはだ（板と板との間に檜の削ったものを入れてみずをとめる）や、白い粘土など造船所で使う材料を売るのは無論のこと、その他に、「どこそこにはいい釣り針がある」とか、「どこそこで船を一隻つくる」と言っていた」から「どこそこにはええ娘がおる」などの情報を伝えたりもしたといます。海は船によって物質だけでなく、人も唄や芸能などの文化など様々なものを運ぶ役割を果たしていたようです。

五 船を造る板は萬屋材木店から

べんこう杉を仕入れて使った

呉市倉橋町や松山市中島町など、遠くの船大工さんからも「機帆船を造りよったが、船の横にはる杉板は何代も続いた老舗、大島の萬屋材木店から仕入れていた」と各地で話があり、すぐそこの大島のことと驚いたことを思い出します。

その柳井市大島萬屋材木店の星出昌之さんは「一七〇

〇年、宝永元年からの店です。宮崎の飢肥（おび）杉を仕入れて商売を始めました。江戸時代には今の良い外材と同じぐらいの価値があったんでしょう。（商売も栄えました）今も宮崎から取り寄せています。昔は千石船で、戦後は機帆船で運びました。船大工も親子代々やっていて、二代、三代の長いつきあいです」と話されました。

周防大島町三蒲の松井利成さんには「萬屋の飢肥（おび）杉、この辺りでは弁甲（べんこう）杉というのが、普通の杉と違って少々曲げてでも粘りけがあつて折れない。筏にして船で引つ張つて来よつた」と聞きました。また、話は「昔は松井造船じやつたが、戦争中は国策で『総力戦完遂』の五つ型の船を多く造るために造船所が統合され、ここも大島西部造船所になった。総型が一番大きくてほしい二五〇トンだった・・」と造船所の歴史にも及んでいき、興味深く話を伺ったのも思い出します。

六 光市牛島で聞いた船大工さんと

そこで歌われた鴨緑江節の話

光市牛島の御前和男さんには、「木造船を造る造船所はあつたんですよ。お宮さんのとこにね。船大工の頭領さ

んがいて。船降ろしでは必ず最初に「新造下ろして浮きなり見れば 沖のかもめの浮き姿おもしろや : えーともえーとも」の唄を歌っていました。この唄を出さんとみんなが他の唄を歌わんのんです。その後が、昔は鴨緑江節とか何とかのうた、みんなが歌った」と聞きました。

また、「この大工の親方ちゅうのが大島郡で習って帰ってきたんです。頭領さんに話を聞くと、三年か四年おつた間に、『何にも仕事をさせてくれんじやった。子守が仕事じやった。昔は子どもが多かったからね』それが、帰ってきて始めたんですよね」と話されていました。そこには昔の、見て、技を盗めという修行のあり方が確かにあったんだなと感じ、心に残っています。

牛島の漁の話も興味深く、「ここは土佐のサバ釣りとか、伊予にも対馬にも漁に行きよったです。また、昔は鴨緑江までも漁に行っていました。鴨緑江へは、林太郎市さんゆうじいさんが有明海、佐賀県の人と知りおうての。ここではアンコウ網と呼ぶが、バツシャ網を習うて帰った。それから、大正から昭和初期にかけての帆船でグチを取りに行くようになったんです。日本では捨てるような魚じゃけど、朝鮮ではグチが一番値がよかったん

です。結婚式でも何でもグチが必要だね。当時は魚が多く、網が上がらんほど取れよったと聞いています」と伺いました。「帰りの船にはタチ、アジ、マナガツオを大きな粒の岩塩に付けて持って帰りよった。山や畑仕事に行く時のむすびなどに入れるんです。それが本当にものすごい辛いんです」とも、牛島の帆船も大きかったとも話されました。

また、「宴席では一杯はいると必ず歌いよった」と話され、県内どこでも歌われた「朝鮮と支那との境のあの鴨緑江 流す筏は アリヤよけれども」と歌われる鴨緑江節に書いています。一度聞くと覚えてしまう親しみやすい唄で、全国的に大流行したそうです。朝鮮半島を歌った唄が、なぜこんなに山口県内全域で歌われたのか不思議ですね。

七 対馬や朝鮮半島まで漁に行った船

牛島の船について、田布施町別府の木下嗣生さんも「牛島の漁師は朝鮮まで行っていた。対馬の方も当然行っていた。日向灘から能登のまわりをやりよった。船が太いの。帆船じゃつても。愛知県型ですよ。愛知県型の船の

導入を牛島が一番先にやったから」と話し、「愛知県型は日本中におったんよ。あの船は波乗りがええ。牛島には昭和三十年頃までおったろうね。追い風には速いよ。帆を蝶々のように広げて。後ろに二つあって前に一つあって。三つあった。後ろの帆が大きな。柱でもこんな。二十トンぐらいあったね」と説明されました。

また、記憶が正しければ、「大洋漁業や日新が朝鮮近海の海面をだいたい買うちよったんよ」とか、「釣ったのを片っ端から買うという仕組みです」とも聞いたように思います。

八 その他の船おろしの唄、船大工の頭領が歌う唄

造船にかかわる唄が、県内にはもう二種類あります。

周防大島町小泊の有川治三郎さんは「祭りのやまを引くときの唄があります。これは、船をおろすときの唄と一緒です」と話され、松前木遣りを歌われました。

有川さんの歌われた祝い唄は歌詞は、「ホーランエー
松前殿様ヤーハーエ イヤヤットコセー ヨーイヤナ
アリア松前殿様 にしんでお茶づけ ヨーイトコナ ア
リヤ エートコ アリヤリヤリヤ ドッコイショ ヨー

イトコセー」というもので、確かに一般的には松前木遣りと呼ばれた唄です。有川さんには「小泊では新造船の船おろしに綱を曳く時の木遣唄としてこの唄を歌い、家を建てる時の地つき唄には、ここでは「ホンエー」と少し違うように歌い始める」ともお聞きしました。

また、同じ唄を、周防大島町大積ではホーランエーがつかない時には亥の子唄、ホーランエーがつくと地つき唄として歌ったとも聞きました。

日本民謡大観にも「新造船の船おろし唄は、全国各地いずれも「松前木遣」を用いているが、山口県も例外ではなく、やっぱり同じように用いている」と載っています。

もう一つお船唄と呼ばれる須佐町の唄もあります。日本民謡大観にはひょうたん節と同じような役目だと載りますが、私自身はこの唄を直接聞いたことはありません。その歌詞は、このようなものです。お聞き下さい。

一「まず今日のお祝に 如月山の楠を

船に造りし今卸す

アエーイ白銀柱を押し立てて

綾や錦帆に巻いて

アエーイ宝の島に乗り込んで

数の宝を積み受けて

アエーイこなたの倉に納めおく

五葉はエー

五葉は目出たのエーノエーイソーレドッコイ

枝もエー栄ゆるノーエーイ葉もエー」

二「新造卸して浮きなり見れば

艫に大黒表に恵比須

中に船玉福の神 七福神も乗り遊ぶ

上から鶴が舞い下り 下から亀が舞い上がり

鶴と亀とが舞遊ぶ

何を舞うかと眺むれば

お船繁昌と舞い遊ぶ

鶴は千年亀は万年

末代までも 五葉は目出度い枝も栄ゆる葉も」

日本民謡大観には、唄の情景として、次のような説明が載っていました。

「さていよいよ船おろしである。船の甲板には船主を始めとする関係者が十四、五人も乗り込んでいる。一方船の外では船大工の頭が音頭をとる「松前木遣」に合わ

せて、コロの上の船を四十人からの人々が押す。「ドート
コセードートコセー」の囃子詞の「ドートコ」で力をこ
め、「セ」でふんばり、「エイヤ エイヤ エイヤ」の掛
け声で一気に押し、また、唄の部分で一息入れ、また押
すといった繰り返しで、海上へ船を押し出すのである。
こうして船が無事海に浮かべば、これで船は船大工の手
から船主のものになり、船主の家に一同が集まって新造
船を祝って酒宴である。船大工の頭を上座に据え、あと
は親類などが順に座る。船主は一番下座である。一同揃
ったところで、頭の音頭で「お船歌」が『合唱される。
頭が自ら歌えない時は、代わりの者をたてても、とに
かく頭が音頭をとり、これが済まないと、他の唄を謡っ
てはいけないことになっており、酒盛りも始められな
い。』

その他、船には船玉様を祀るが、船玉様はばくちが好
きじゃけ、サイコロをいれるとか、色々な話を聞きまし
た。

おわりに

この講座は、前半は戎谷が和船の使われている文化的

な背景などを話し、後半は森本孝氏が全国各地の和船を写真で紹介しながら、船に使われた材木と出来る船の構造や船大工の技術について話したものである。

この講座に取り組んだことによって三つのことを痛感した。一つ目は、かつて、プライドを持って働いてきた多くの人たちの生活の場と技術が失われていくということである。例えば、木造船からプラチックなどの船に変わると、木材が要らなくなる。何より、船を造ったり木を切り出したり、木を育てたりを生業とする人が要らなくなる。当然、長年積み上げられ磨かれてきた技術が失われ、だんだん修理もできなくなり、益々木造船は減るということだ。

二つ目は、係わる技術も人も居なくなると、当然ながら、そこにあった唄や仕来りなどの文化的風土も失われていっているということだ。

三つ目は、一つ目と二つ目のことを踏まえて、技術、文化を継承していくことは無論のこと、特に、蓄積した技術と地域の木材を使って、生活が出来るような仕事を生み出す必要があり、考えていきたいということである。

（文化交流センター地域交流員）

〔付記〕

本稿は、平成二五年十一月一七日に開催された講演会「船大工道具と木造船の世界」で話した「瀬戸内で聞いた船大工の唄や話」の内容に加筆・修正した。

その中で紹介した録音テープを聴いた萬屋材木店の星出さんが、「植松さん（倉橋町の船大工）は先日NHKの番組で歌っていました。もう息が漏れて、年だなど思いましたよ。今日の唄で上手じやったとつくづく思いました。一番ええ時に録音されました」とおっしゃった。

二時間二〇分ぶつつけに森本孝さんと二人が話してとの話題に、「内容が面白いのであつという間に過ぎました。船の技術を中心に色々な話や写真を見せて貰いました。船の話を取り上げてくれてありがたいです」と話された。来年に岩国で作る「鵜飼船」の材料を今は乾かしているそうだ。

また、岩国市由宇町から昔、由宇の廻船などの話を伺った村田さんが、奥さんに支えられ、杖をついて来られていて、「良い話を聞きました」と再会を喜ぶとともに話に來られた。当日の参加者は三〇人と少なかったが、一人も帰る人もなく、やって良かったとほっとした気分

させてもらった。特に印象に残ったのは、会員の一人が隣の方に説明を求めたり、感想を話し始めた時に、「静かに出来ない人は出て行って貰って下さい」と私語に対して発言したこと。私のつたない話をも聞きもらさないようにと、勇気を出して発言されたこと。そんな緊張感の中で話すことができたこと、この講演のために色々準備をして良かったと痛感させてもらった。

会終了後、多くの方が、展示を見て話したり、森本さんに船の種類やその技術などの説明を求めたりしていた各地から、興味がある人だけが集まるそんな講座もいかなど感じた。

【参考文献・参考 CD】

- ・日本民謡大観・中国編 日本放送協会編
- ・周防大島昔話集「宮本常一編著」 瀬戸内物産出版部
- ・ふるさとのわらべ唄 94 回（中国新聞連載記事）
- ・船大工の話 1「戎谷和修著」中国新聞社
- ・ふるさとのわらべ唄 95 回（同前）
- ・船大工の話 2「戎谷和修著」中国新聞社
- ・ふるさとのわらべ唄 296 回（同前）

鴨緑江節 「戎谷和修著」中国新聞社

【交流短信】

こんにちは！東和図書館です。

寒い毎日、いかがお過ごしですが？炬燵に入って大島みかんを食べながらの読書？それともテレビでソチ五輪応援でしょうか？

さて、来る三月一日土曜日は、第一〇回東和図書室まつりです。

午前十時、大正琴の演奏に始まり、お話会があります。絵本の読み聞かせやオカリナ演奏など、子ども達はもちろん、大人も童心に返って楽しみたいでしょう。そして、おいしいぜんざいの接待の後は、絵手紙体験やお楽しみゲームもあります。

また、館内には、生涯学習の皆さんの作品を展示しております（短歌教室・絵画教室・パッチワーク教室など）。もちろん毎年好評の古本や古着などのリサイクル市もあります。何か掘り出し物が見つかるかもしれませんよ。

そろそろ暖かくなる三月。皆さんお揃いで東和図書室まつりへおいでませ！（M）



ユイで行う田植え。近所の者や親戚があつまって共同で苗を植えていった。三ヶ浦 昭和34年6月

【連載】古写真の風景をあらく（二）

水田からミカン畑へ ― 農業の曲がり角 ―

高木 泰伸

一 田植え ― ユイと牛耕 ―

周防大島の東部、東和地区には三〇を超える集落が浦々に点在する。急傾斜の山肌に段々畑を拓き、水がとれるところに水田を拓いた。山が浅く砂土で、イモと麦を中心として栽培し、水稻も日照りがつづけば不作になるという年も少なくなかったようだ。

田植えは、牛を使って田をおこし、シロカキをし、親族や地域の人たちが手間替えで苗を植えていった。この手間替えを結（ユイ）という。

田植えは苗をとって、中腰になり一摘みずつ植えていくので楽な作業ではなかった。それも足場の悪い田の中でおこなう作業である。それでも人びとが集まれば会話ははずむ。世間話がつらい労働を明るくしたし、田植えが終わればドロオトシとして飲食をともにする楽しみもあった。いわば労働という「ケ」のなかの「ハレ」の日であった。

耕耘機（ティラー）が入って農業が機械化されるま



牛を使ったシロカキ 三ヶ浦 昭和34年6月



苗取り 三ヶ浦 昭和34年6月



稔りの秋 三ヶ浦 昭和30年頃 後藤清人撮影

で、多くの農家が牛を飼っていた。牛を持たない家は、牛を持った家に頼み、牛も人と同じく一人給を払ったという。

「牛は人間よりも働いとったんじやけえ、給金はもらわな割に合わんよね。それに牛の世話もせんといかんしね。牛は人をみるけえ、誰でも扱える訳じやあない。かわいがってやったモンにはなついてくれて言うことをさいてくれるんよ」と地元の人は当時を懐かしみながら話してくれた。

牛を飼うには、その餌になる草も刈らなければならない。毎日の水やりもある。しかし、牛を飼っていればタオコシやシロカキもでき、また牛糞は肥料になった。子供たちも牛の世話をすることで家畜を扱う術を身につけていった。

二 周防大島のミカン

戦後になると、イモ・麦・米といった自給的な農業では経営が成り立ちにくくなる。養蚕業も化学繊維の発達で右肩下がりとなっていく。そこで、周防大島ではミカンの栽培に転換していく。

周防大島のミカン栽培の歴史は古く、慶長の頃の検地帳に徴税対象になっていたことが伺われ、また天保年間の『防長風土注進案』にもみることが出来る。そして幕末に日前村の庄屋だった藤井彦右衛門が紀州から苗木を持ち帰ったのが、今日につながるミカン栽培の起りだとされる。しかし、彦右衛門が持ち帰った苗木は枯れてしまい、その後、明治になって再び河合某と言う者がミカンを植えた。これが日前地区でのミカン栽培のはじまりとされる。また長崎（現東和地区）の山本萬之丞が優良な品種を発見し接ぎ木によって地域へミカンの栽培を広めていったという（※1）。



藤井彦右衛門顕彰碑 日前



山本萬之丞顕彰碑 長崎

そして昭和初期にはすでに大島は有数のミカンの産地となっていたようである。戦後の海外向輸出が再開されると、昭和二五年（一九五〇）には、大島ミカンがクリスマス用としてカナダ向けに輸出された。周防大島は北米への移民も多く、そういった人たちが仲介したとも推察できるが、詳細はわからない。

その検査会に出席した県の担当者が、「大島蜜柑二千四百六十箱は十一月十六日第六船ベアー号で箱出されたが検査の結果、不合格になった三・七%で、各県が出した不合格の平均九・七%より、はるかによい成績であった」（※2）と伝えるように、その品質検査でも優秀な成績を修めていることがうかがい知れる。

この当時、「大島郡柑橘振興促進協議会」も設立されていて、島外への販売を積極的に推し進めていたようである。昭和二五年一月一〇日付の『防長新聞』には「祝大島みかん海外輸出」の文言を掲げた広告があり、山口県柑橘研究同志会などともに、その名前をみることが出来る。

「㊤や東、砂のマークのついたミカン箱に入れてそれぞれ出荷しました。㊤は日前の、東は東和の、砂は沖浦



ミカンの幼木を植える 長崎付近 昭和35年4月



水田をミカン畑に 長崎付近 昭和35年4月



ミカン木々が茂る 昭和50年12月



下田八幡周辺の水田に植えたミカン 昭和41年4月

のというふうと同じ島内でも産地によって値段が違ったんです。④が一番値が高くていたように思います。ほとんどが東京市場向けに出荷していて、農協の放送で市場価格が地域に放送されていましたね。ミカンもぎは大変ですから、共同でやつたり、手伝いを雇ったりすることもありました。ミカンの価格のいいときは、ミカン一箱、一五〇六キロですね、それが大人一人の一日の日当よりも高くて、給金はいらんからミカン一箱をくれという人もいましたよ」と長年にわたりミカン栽培を続けた農家の人は話してくれた。

現在でも、山口県産ミカンの約七割を大島産が占めるが、このように大島郡がミカンの一大産地になったのは、昭和三〇年から四〇年代にかけての大規模な作付け転換によるところが大きい。

三 ミカンへの作付転換

作付転換は昭和三〇年頃から徐々にはじまったという。宮本常一は、「先祖伝来の米を作る田にミカンを植えるのは国賊だなどという貼紙を電柱にする者もあった。しかし昭和三〇年頃になると、田に植える者が出て来た。は



白木山のふもと下田地区での集団作付転換 昭和39年頃 後藤清人撮影

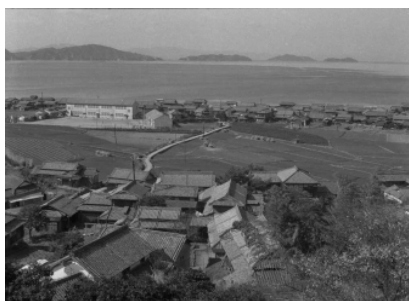
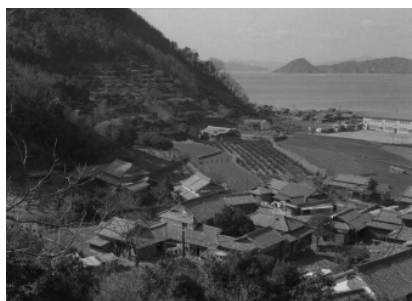
じめは日やけ田などに植えていたのが、次第に良田にも植えるようになっていった。そしてそれは島全体の風潮になっていった。大正時代に桑を植えた頃には田に桑を植える者はほとんどいなかったし、畑の中にも麦を作っているものが多かった。それが昭和三〇年を境にして、すべての耕地にミカンが植えられはじめてくる」と当時の様子を綴っている（※3）。

下田地区では、昭和三八年一二月に農業構造改善事業で、五・六ヘクタールの水田をミカン畑に共同作付転換し、「マンモスみかん団地」を造成した。平野地区では同時期に、一〇人の農家が農事組合法人「平野柑橘生産組合」を設立し、買い取った地区有林のうち三・六ヘクタールを開墾、早生ミカン五四〇〇本を植えた（※4）。

このような共同したミカンの植え付けが島内各地で行われた。

和田地区で長年にわたり農業を営む植生文子さん（大正一四年生）は、次のように回想する。

「ずっと桑畑だったところにミカンを植えはじめました。いま私の家のミカン畑ももとは桑畑。私が嫁に来た頃にはもう養蚕はやめていましたが、養蚕の道具が



平地には水田がひろがる和田地区。写真左上にみるように山手から徐々にミカン畑に 昭和 40 年 2 月



ミカンには袋がけがしてあった 平成 26 年 2 月



水田はミカン畑や宅地に換わる 平成 26 年 2 月

屋根裏にたくさんありました。はじめは山の畑の方にミカンを植えていって、それから田んぼにも植えていくようになったように思いますね。戦後すぐの頃に若い者たちが 4 H クラブというのをつくって、耕耘機を買って地区の田んぼを共同で耕しよったんですよ。その人たちが中心になってミカンを植えよう言うて、それからだんだんとミカンに換わっていったように思います。」〔※5〕

「4 H クラブ」というのは、地域の振興を考える知識（Head）、地域を改良していく技術（Hand）、それを担う健康な体（Health）、そしてその志（Heart）を育むことを目的として、農村青年を中心に戦後に推進して組織されたグループである。頭文字の四つ H をとって「4 H クラブ」と名付けられたのである。

四 農業の機械化

和田地区の 4 H クラブは活発な活動をしていたようで、当時の新聞にも紹介されている。作付け転換へいたる経緯がわかるので、少し長くなるが引用しよう。

「〔ミカンの作付け転換や共同選果場設置など、〕こうした動きの推進力になっているのが、和田村の七人のさむ

らい、中原雅利（三三）、中川照人（三三）、岡島満次郎（三一）、藤岡精一（三一）、山本博（三一）、平原幸夫（二六）、浜広豊（二六）の七人がそれだが、この七人がスクラムを組むようになってから、もう十年。「昭和」二五年から農業普及の講習会、4 Hクラブ活動を通じて結びつき、一時は4 Hクラブ活動では大島郡一で表彰も受けた。こうして彼らは社会活動、公共活動で実績をあげたが、それが進めば進むほど農業という彼らの実生活から遑〔乖〕離して二律背反的な大きな障壁にぶつかった。

／三十年になると農業事情も変わってきて、従来の米麦一本の農業では経営が苦しくなり生活の基盤にヒビが入ってきた。何とか考え直さなければ、というのでクラブ活動も実生活に直結したものを、という線を打ち出して特産対策としてミカンを取りあげることにした。三〇度／三五度もある傾斜地を開墾していると石ころばかりで大へんだったが、やらなければと手がけると、近所の人たちは『十年も二十年もしなければ成木にならないみかん栽培に、あんな苦勞して…』と、バカよばわりさえ聞かれた。／そんな中みんな歯をくいしばった。みかんに手がけてみると、いままでのような田畑の耕作では労力

が不足する。それで共同で久保田のガーデン・トラクタ（二四万円）を購入。これで浮いた畜力（役牛）を乳牛に切りかえた。耕運機の購入にも、とかく批判があったが、賃耕してみると、その効果が判ってきて、白い目でみていた村人が、われもわれもと依頼にくる。使い方も荒かったが、機能も小型だったので、三十三年、さらに十万円を加えて深耕がきく中型耕運機を買った。七人のさむらいは三十四万円の借財をかかえたが一般の理解が高まり、賃耕もふえて年間十五万円の仕事ができ、年間七万円くらいは耕運機の償却費に当てる事ができ、一万円から一万五千元はクラブの費用に当てて活動を一段と活発にしている。／それよりも彼らは、この共同の借財、というより共有資産耕運機によって一段と結束を固め、もはや耕運機によって完全にはなれられなくなってしまった。みかんの増殖や耕運機の償却に追われながらも研究は進められている。」※6

そして「七人のさむらい」は昭和三四年には九千本ものミカンの苗木を植え付けた。ミカンが実益をあげるまでは、養豚を営むなどの工夫もしたという。

ともかくも和田地区の共同作付転換は4 Hクラブの活



嶽山の山頂までひらかれた段々畑にミカンが植えられていく。平地はまだ水田である 油宇 昭和41年12月

動と、耕耘機やトラクターを導入するという「農業の機械化」に起因している点が興味深い。

和田地区が共同耕耘、共同作付転換に取り組んでいた同時期、安下庄の川間地区のミカンが品評会で一位の成績をおさめた。

それを伝えた新聞記事では、①役牛に与えていた草を、耕耘機を導入することでミカンの防寒・干魃防止に使用できるようになり、また少ない労働力での栽培が可能になったこと、②共同防除、共同摘果を地域ぐるみで実施したこと、③農業経営者が若く新しい時代へ順応していること、それがミカンの品質向上につながったと指摘している。さらに米の作付面積（七九四アール）が、ミカンのそれ（六八五アール）よりも広いにもかかわらず、収益は米二二万円余りに対してミカン六四六万円であり、その将来性が有望視されている^{※7}。

ミカンの大規模な作付転換が行われた時代はまさに農業の転換期であった。役牛から耕耘機という農業技術の革新は、農業労働力の余剰を生み出し、この時期は多くの人びとが工業地帯・都市部へと移動しはじめた時代でもある。機械化は少ない労働力を補ったが、一方で農業

にかかる資本投下を大きくさせることにもなった。しかし、それが顕在化するのとはこれから後のことであり、ミカン栽培は低迷しつつあった農業経営を復活させ、周防大島に多くの富をもたらすことになる。昭和三〇年代はまさに農業の曲がり角であった。

おわりに

油宇地区の六〇代の方が、天まで延びる嶽山のミカン畑の写真をみて、「これですね、私の子供の頃の風景。いまのこの段々畑が山に帰っています。昔の人はよう考えて、よう働きました。私の親父もそうです。ミカンも新しい取り組みだったんです。だけど、ミカンの次がなかった。私たちが考えることができなかった。山がこんなになったんは私たちの責任でもありますよ。これからの若い人には、今の感性でもう一度島を元気にしてもらいたい」とおっしゃったのが、印象的だった。

この方が、おっしゃりたかったのは「責任」の問題ではなく、先人への尊敬と、若者への期待である。いま、「農」が再び曲がり角にさしかかっている。そういう時代を考え、若い感性を発揮して欲しいという期待が込め

られた言葉だった。そして、厳しい現実のなかで農業に勤しんできた島の人たちの誇りがあるということが、言葉とは裏腹にその表情に見て取れた。

いうまでもなく、農業は厳しい時代を迎えている。ここで紹介した昭和三〇年代は「農の産業化」(インダストリー)の時代であり、それは一定の成果をおさめたと歴史的な評価をしても差し支えないだろう。しかし「アグリカルチャー」をもう一度みつめなおし、「インダストリー」から「カルチャー」へと向かう価値付けはできないだろうか。環境や教育的な効果も含めた複合体としての農のあり方、島の資源化への取り組みにもつながる期待も込めて、「農の文化化」を考えてみたい。

なお、本稿ではミカンへの作付転換に重点をおいた形で論を進めてきたが、流通という面については十分な言及が出来なかった。ミカン栽培は市場の動向との関わりが深いため、今後はミカンの価格変動と流通の問題にも留意しながら考察を深めいくことを課題としたい。

また県の農業政策や普及所などの技術指導については紙幅の都合から割愛した。これについては稿を改めて述べることにしたい。(文化交流センター学芸員)

〔脚注〕

- ※1 宮本常一『私の日本地図9 周防大島』（宮本常一著作集別集、未来社、二〇〇八年）、五四～五七頁。
- ※2 「海外輸出は好成績 大島みかん」『防長新聞』昭和二年十二月一九日
- ※3 前掲、宮本『私の日本地図9 周防大島』、五一～五二頁。
- ※4 「東和広報」昭和三九年七月号（『とうわ広報縮刷版』第一巻、東和町役場、一九八五年、四二四頁）
- ※5 平成二六年二月九日聞き書き
- ※6 「新しい農業グループ15 耕耘機を中心に結束」『防長新聞』昭和三五年九月三〇日。「」内は筆者註
- ※7 「新しい農業グループ10 大島一の品質誇るみかん」『防長新聞』昭和三五年九月二三日

〔付記〕

① 本稿で使用したモノクロ写真は断らない限り文化交流センター所蔵の宮本常一撮影写真である。またカラ

ー写真は「古写真の風景をあるく」などの企画の際に筆者及び参加者が撮影したものである

② 本稿は、公益財団法人福武財団の助成金「宮本常一撮影写真による瀬戸内文化の資源化」（研究代表・印南敏秀）による成果の一部である。

【コラム 周防大島の窓】

「私の好きな周防大島」をテーマに

東京写真月間「一〇〇〇人の写真展」に出展

柳原 一徳

公益社団法人・日本写真協会主催の東京写真月間二〇一三(※)のイベントの一環として、昨年六月八日(土)から一二日(水)まで、「新宿パークタワー・ギャラリー3」で「一〇〇〇人の写真展」が開催されました。周防大島の魅力を一人でも多くの方に知ってもらうために、「私の好きな周防大島」のテーマを設けて一人につき一点、参加費一〇〇〇円にて、地域交流員有志を中心に三二点の作品を出品しました。

作品のタイトルと参加者名は以下の通りです。

ココがお気に入り? 竹谷啓(周防大島)／ハイ、チーズ! 菊本雅喜(周防大島)／水あそび 扉野良人(京都府)／コイノボリ 柳原悠子(周防大島)／あー、懐かしいね、この顔 斎藤潤(千葉県)／瀬戸内ブルー 岡元博(周防大島)／いい天気!

隅杏奈(山口県)／港の見える丘 国光博史(周防大島)／島の春 綿原澄子(周防大島)／エメラルドブルー クリスタル・アヤ(周防大島)／ハレの日を待つ武者絵幟 島尾はるか(千葉県)／春の嵩山 光田伸幸(周防大島)／ようこそ庄南ビーチへ 国光京子(周防大島)／ウミイチゴ 福田隆司(周防大島)／かーちゃんときーちゃん 柳原一徳(周防大島)／海の見える路地 金山一宏(広島県)／孫の眼 堀重和雄(周防大島)／祭りはええもんじや 森本孝(千葉県)／ふうふ 今石みぎわ(埼玉県)／最後の合同運動会 岡村裕子(周防大島)／天空の城「嵩山」 稲村省吾(周防大島)／我が家の保存食 豊田春一(周防大島)／花見 岡田忍(周防大島)／なつかしの四世代と段々畑 藤本久雄(周防大島)／浜辺の戯れ 山本芳子(周防大島)／石風呂の薪を運ぶ漢達 徳毛敦洋(周防大島)／ハマチ GET! 野村妙子(周防大島)／末恐しき娘達 後藤清人(周防大島)／ユウヤケヒガタ 高木泰伸(周防大島)／石風呂 正本眞理子(広島県)／山中の棚田 寺本常次(周防大島)／棚田のハサ

架け 岡村弘子（周防大島）

四季の表情や子供たちの笑顔など、周防大島の様々な魅力を切り取った写真はどれも味わいがあるものです。

今回は昔撮影したモノクロ写真を出品される方もいて、バリエーションに富んだ内容になりました。このうち、「ハレの日を待つ武者絵幟」と「棚田のハサ架け」の二点が、総務省の海外向け英文刊行物「STATISTICAL HANDBOOK OF JAPAN 2013」に掲載され、周防大島の風景が世界に向けて発信されたことは思いがけないことでした。

周防大島から数多くの作品を出展したので、イベント主催者は、一地域でこれだけの数や種類を出展していただけで大変よろこばしいことですと話をされていました。

また、返却されました写真を、来る三月一日（土）から一六日（日）まで、周防大島文化交流センターで展示します。

そして今年もまた、「周防大島組」で、同じテーマで出品したいと思います。募集要項の確定



「1000 人の写真展」展示風景
（撮影：竹本吉宏）

する四月頃に改めてご案内いたします。

（文化交流センター地域交流員）

※「東京写真月間」(The Month of Photography, Tokyo) は、写真文化の普及と発展を図るために社団法人日本写真協会が写真業界に呼びかけて催されている写真イベントです。催事は六月一日の「写真の日」を中心とした五〜六月にかけて、東京都写真美術館を軸に東京都内の写真ギャラリー、フォトサロンで催される写真展やイベントなどで、プロ、アマチュアの枠を超えたものです。主催は東京写真月間実行委員会（社団法人日本写真協会と東京都写真美術館）が行い、後援に外務省、文化庁、東京都、協賛に写真関連企業などが参加して、一九九六年から毎年この時期に行なっています。（公益社団法人日本写真協会サイトより転載）

「命の水」???

舛田 良樹

地球上の水は約九七%が海水、三%が淡水です。その淡水のほとんどが氷河、氷山であり人間が直接利用できる淡水は僅か一%未満です。地球上での水の循環は海水が蒸発し雲をつくり陸地に雨又は、雪となって降り注ぐ、その水が地表や地中を経て川となり海へと帰る。陸地に降り注いだ水により地衣類、植物が生息を始め、それを餌とする動物が現れ、川辺には人類の文化が生まれた。その人間の体内は六〇〜六五%が水によって占められており人間は地球上における水の循環の一端として生かされている。

水は化学式で「 H_2O 」水素が二個と酸素が二個の化合物で個体を氷、液体を水及び気体を水蒸気と呼び奇跡的に地球に存在した。物理的な密度、融点、沸点及びカロリー等の基準物質とされている。

その水の恩恵で生息している人間は、どんな水を飲めばよいのだろうか。飲用に適する「おいしい水」とは？体に良い水は？ミネラルウォーターは？などなど疑問を

持たれる方が多かろうと思います。

厚生労働省は「おいしい水」の調査で次の基準を示しています。

- 一、蒸発残留物（ミネラル）：三〇〜二〇〇 mg/l
- 二、硬度：一〇〜一〇〇 mg/l
- 三、遊離炭酸：三〜三〇 mg/l
- 四、過剰な酸消費量：三 mg/l 以下
- 五、臭気度：三以下
- 六、残留塩素：〇・四 mg/l 以下
- 七、水温：二〇℃以下

上記一〜三の項目については約 10 倍の範囲があり、四〜七の項目については〇〇以下と何を示しているのか釈然としません。

ある水質検査機関では「おいしい水」の大きな要因は水温で一〇〜一五℃が最適との報告もあります。

一般的に飲用とする水は水道水で通常湖水、河川水及び、伏流水を取水して汚れを沈殿・ろ過・殺菌の処理を行って水道法に従い五〇項目の検査に適合したものを家庭に供給している。

ミネラルウォーターは水のみを原料とする清涼飲料水

で鉱水、地下水のうち地層のミネラルが溶解したもの又は、それらにカルシウム等を添加しミネラル分を微調整した後、加熱殺菌してペットボトルに充填する。また、それらに炭酸を注入することもある。これらの商品は、食品衛生法により安全管理されている。

ペットボトルの水は全てミネラルウォーターと思いがちであるがナチュラルウォーター、ボトルウォーターもありナチュラルウォーターは地下水で加熱殺菌し充填したもの、ボトルウォーターは水道水等、水道法に適合した水を充填したものです。

そんなことは、どちらでもいい。「何を飲めば体によく長生きできるのかが知りたい」と思われている方が、ほとんどであろう。まあ、焦らず聞いてください。

日常使用している水道水ですが、これは水道法により安全が保障されています。しかし、水処理で殺菌工程があります。この工程で塩素により殺菌しますが取水には有機物を含んでいるためトリハロメタン類が生成されます。これらは、発がん性があり水質基準値は総トリハロメタンとして〇・一 $\mu\text{g/l}$ 以下とされています。この値以下を摂取しても人間の寿命に影響がないということです

が自然界に存在しない物質のため低ければ低いほど健康には良いことになります。

因みに山口県では〇・〇二 $\mu\text{g/l}$ ・〇四 $\mu\text{g/l}$ 程度です。

トリハロメタン類は低沸点のため沸騰させることで水から大気中に放散されてしまいます。そのため、お茶等煮沸して飲む分には問題ありません。ただし、沸騰させた後、冷やして用いるときは殺菌剤である塩素も放散され細菌が増殖しやすいので長期保存はできません。

ミネラルウォーター等ペットボトルに充填した水についてはホルムアルデヒド、アセトアルデヒドが容器から溶出されることを日本薬学会（二〇〇四）では問題にしています。

両物質とも発がん性が確認されています。

現代は基準値としてホルムアルデヒドが〇・〇八 $\mu\text{g/l}$ 以下、アセトアルデヒドについては無くアルデヒド類の取り扱いについては見直しが検討されている模様です。両物質とも自然界に存在しないため検出されないに越したことはありません。

これらを総合してみますと水は基本的に時間とともに流れ循環していくのが自然の法則で河川を堰き止めダム

等により貯留したり容器に保存したりすると何らかの傷害を起こします。

じゃあ「飲むものは無いじゃないか」と言うことになります。理想的には北アルプス等高山で動物の生息が少ない場所の湧水ですが、そう簡単には手に入りません。

とりあえず水道水を二〜三分煮沸してガラス容器に入れ一〇〜一五℃に冷やして飲用することを、お勧めします。少なくともミネラルウォーターを購入して飲むよりコストも安く安全でしょう。因みに私は水道の蛇口に口をつけガブガブのんでいます。飲用水の水質は健康を保つ要因として、ほんの僅かだと思います。

それよりストレッチ等で体を動かして錆びつかせないライフスタイルの方が大切ではないでしょうか。しかし、面倒なことは嫌いで水に健康を求めるほうが楽ですね。水は低きに流れるように人も安きに流れることが多いようです。

これ幸いとミネラルウォーター業界がいろんな成分を売りに名山の自然から湧き出る延命の水の如く販売しています。

まあ、イワシの頭も信心からみたいなものだと思います。

す。何れにしても健康に老いて人に迷惑をかけないで寿命を全うしたいものです。アーメン、南無阿弥陀仏、イワシの頭など八百万の神々に祈ります。

(文化交流センター地域交流員)



和田庄里地区のツルベ井戸
撮影:友森新二

【活動記録】

周防大島文化交流センター日誌

（平成二五年九月～十二月）

【九月】

・八日 地域交流懇談会（第四回）

活動状況など意見交換

・一五日 お猿じゃ編めない竹カゴ基礎講座―竹ヒゴづ

くり 交流センター／一〇時～一六時

講師・稲垣尚友氏（竹大工・民俗研究家）

・二六日 水産大学校視察（二七名）

高木が館内説明

・二七日 山口県行政相談員研修会（一三名）

高木が館内説明

・二八日 姉妹島提携五〇周年青少年海外派遣事業（カ

ウアイ島）に伴う事前研修会

大島庁舎／九時～九時五〇

高木が講師を担当、「宮本常一の旅に学ぶ」

・二九日 地域交流講座（第三回）

交流センター／一四時～一六時

【一〇月】

受講者発表「私の課題とこれからの取り組み」

・一日 地域資料調査

後藤清人氏旧蔵資料の調査

・七日 大阪教育大学教授・職員視察

大阪教育大学付属図書館での宮本常一関連展

示開催の資料調査

・一〇日 『文化と交流』NO. 1刊行

・一一日 久賀小学校展示見学（二二名）

山根が館内説明

防府市老人クラブ展示見学（五三名）

山根が館内説明

片淵須直（アニメーション映画監督）視察

高木・田中（地域交流員）が館内説明

三蒲小学校展示見学（六名）

高木が館内説明

・一三日 地域交流談話会（第五回）

交流センター／一〇時～一一時三〇

地域交流員報告「周防大島町周辺海域の生態

系に係る水質データ解析」(舛田良樹)、D V
D『周防大島東部の生産用具』視聴、活動状
況など意見交換

・一七日 島中小学校展示見学(八名)

高木が館内説明

・二三日 定例清掃日

資料保存を目的として書庫および展示室内
の清掃作業

・二五日 安下庄小学校東和収蔵庫見学(一五名)

高木が収蔵品の説明

・二七日 放送大学面接授業(受講者四四名)

交流センター展示室見学、高木が講師を担当、
「周防大島の暮らしの民俗」「周防大島が生ん
だ民俗学者・宮本常一と離島の民俗」

【一二月】

・二日 畑で遊ぶう！(農業体験)

なぎさ農園／一四時～一六時／一四名参加
サツマイモ掘りと販売看板づくり。なぎさク
ラブと共催。地域交流員四名もインストラク
ターとして参加。

・九日

体験学習・なぎさいモの販売

道の駅サザンセント東和／一〇時～一二時／一二
名参加／道の駅で収穫したサツマイモを販売。
収益でセンター体験学習室へ図書寄贈／地域
交流員一名も参加。

・一〇日

地域交流懇談会(第六回)

交流センター／一〇時～一一時三〇
交流員の活動報告・意見交換

・一七日

古写真の風景をみるく

浮島を調査、宮本常一写真の定点調査
地域交流員一名参加

・一八日

離島振興六〇周年記念功労者表彰式典(於東

京・グランドアーク半蔵門)にて、
交流センター制作の写真パネル「宮本常一、
島へのまなざし」を展示(担当・高木)。

・二三日

近畿民具学会来館

高木が館内説明、および「宮本常一写真の社
会的活用」を報告

・二四日

企画展示「宮本常一と岡本太郎―日本をみつ
めた二つのまなざし」開始(担当・高木、一

月二六日まで)

・二八日 文化交流センター運営協議会

東和総合センター／一三時三〇～一六時

【一二月】

・七日 クリスマス会

文化交流センター／一三時三〇～一六時

・八日 地域交流懇談会(第七回)

東和総合センター／一〇時～一二時三〇

地域交流員報告「漂着ゴミの調査と分析」(舩

田良樹)、「古写真の風景あるく」浮島報告」

(友森新二・山根)、企画展「宮本常一と岡

本太郎」観覧(高木説明)

・二一日 情島老人クラブ誕生会にてスライドショー「宮

本常一がみた情島」(高木説明・聞き取り調査)

・一三日 山口県立大学福祉学科(高木健志ゼミ)来館

一六時～一八時／高木・山根館内説明

・一四日 山口県立大学福祉学科(高木健志ゼミ)研修

東和総合センター／九時三〇～一二時

回想ワークの取り組みなど聞き取り調査(コ

ーディネーター・高木)

・一五日 企画展示「宮本常一、島へのまなざし」開始

(担当・高木、三月三一日まで)

企画展「宮本常一と岡本太郎」ギャラリート

ーク(高木説明)

・二〇日 東和中学校にて出前授業。高木が「郷土を調

べる」を講義

・二五日 しめ縄作り体験

東和総合センター／一三時三〇～一六時

かがやき塾と共催

【編集後記】

『文化と交流』No.2をお届けします。本号では、カウアイ島との姉妹島提携五〇年を契機に人間の移動をテーマに特集を組みました。ご一読いただければ、古くから外に目を向けた周防大島の風土を感じ取っていただけのものと思います。

あわせて、論考三本、コラム二本を掲載しております。地域交流員の方から多数の投稿をいただき、予想以上に充実した内容になりました。いずれも周防大島を舞台にした力作です。

『文化と交流』をみれば周防大島のことがよくわかる、と言われるように今後も編集作業を進めていきたいと思っています。(編集担当・高木泰伸)

※『文化と交流』は、左記の周防大島文化交流センターのホームページからダウンロードできます。

<http://www.towatown.jp/koryu-center/koryu.html>

文化と交流 NO.2

二〇一四年二月二五日 発行

編集 周防大島文化交流センター

発行 周防大島文化交流センター

〒七四二―二五一二

山口県大島郡周防大島町

平野四一七―一一

電話・FAX

〇八二〇(七八)二五一四

【機関誌『文化と交流』に関する投稿規定】

- (一) 投稿できる者は、周防大島文化交流センターおよび周防大島町に所属する者（学芸員・町職員・地域交流員）および編集担当が許可した者に限る。
- (二) 投稿原稿は原則として日本語に限る。
- (三) 投稿原稿は、周防大島をはじめ農山漁村の生活や環境、および周防大島文化交流センターもしくは周防大島町が所蔵する資料に関連したものを主題として、望ましい。ただし、編集担当が適当と判断したものは受け付ける。
- (四) 原稿の字数は原則として八〇〇〇字を上限とする。ただし、編集担当が適当と判断した場合にはこの限りでない。
- (五) ワープロ原稿で投稿される場合は、A4版、三〇字×四〇行、縦書きで作成し、印刷原稿とデータを提出すること。手書きの場合には一マス一字、縦書き、楷書で作成すること。また写真・図版・表などを挿入する場合には必ずデジタルデータ化したものを提出すること。
- (六) 投稿された原稿は、編集担当、または編集担当が指名するオブザーバーによって審査し、できるだけ早く採否を通知する。
- (七) 掲載原稿の著者本人による転載はこれを妨げない。ただし、周防大島文化交流センターへの届け出を必要とする。第三者が転載を希望する場合には著者本人への許諾を得るものとする。
- (八) 本誌に発表された論考等の著作権は、周防大島文化交流センターに帰属する。
- (九) 学術研究および教育目的で本誌の複写を行うことは妨げない。ただし、複製品を第三者が営利を目的として販売することは禁ずる。